

宮崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告IV

# 箱崎 22

—箱崎遺跡第22次調査報告(2)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集

2005

福岡市教育委員会

芦崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告IV

HAKO

ZAKI

箱

崎

22

—箱崎遺跡第22次調査報告(2)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集



遺跡略号 調査番号  
HKZ-22 0022

2 0 0 5

福岡市教育委員会



巻頭図版



箱崎遺跡第22次調査5区と宮崎宮（東上空から）



## 序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、筥崎土地区画整理事業に伴い調査を実施した箱崎遺跡第22次調査の成果を昨年度に引き続き報告するものです。今回の調査では、中世の集落跡を確認すると共に、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りました福岡市土木局をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長植木とみ子

## 例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が筥崎土地区画整理事業に伴い、東区馬出5丁目、箱崎1丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第22次調査の報告書である。
2. 報告する調査の細目は以下のとおりで、本書は、5区の報告書である。なお、4区については、『箱崎17a(福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集)2004年としてすでに報告を行った。

調査番号	遺跡略号	調査区	調査面積	調査期間
0022	HKZ-22	4区	2,473m <sup>2</sup>	2000.7.24~2001.4.18
		5区	503m <sup>2</sup>	

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は権本義嗣、上田龍児(福岡大学人文学部学生)、西田絵美、渡邊誠(九州大学文学部学生)が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は権本、木下博文、池田祐司、長家伸が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は権本が行った。
6. 本書に掲載した空中写真の撮影は朝日航洋株式会社が行った。
7. 本書に掲載した遺物写真の撮影は平川敬治が行った。
8. 本書に掲載した挿図の製図は権本、安野良、副田則子が行った。
9. 本書で用いた方位は、座標北で、真北より0° 19' 西偏する。
10. 本書に記載した座標は国土調査法第II座標系に拠っている。
11. 遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
12. 本書で記述する遺物の分類、説明等については以下の文献を参考とした。

山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」

『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年

山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」

『中近世土器の基礎研究 IV』1988年

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」

『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』(太宰府市の文化財第49集)2000年

13. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。

14. 本書に関わる記録・遺物等の資料は同埋蔵文化財センターに保管される予定である。

15. 本書の編集および執筆は、権本が行った。

# 本文目次

I .はじめ	1
1 .調査に至る経緯	1
2 .調査の組織	1
II .遺跡の立地と環境	2
III .調査の記録	6
1 .調査の概要	6
2 .5区の調査	7
1 )概要	7
2 )遺構と遺物	7
(1)井戸(SE)	7
(2)土坑(SK)	15
(3)溝(SD)	29
(4)その他の遺物	33
IV .結語	34

# 挿図目次

第1図 箱崎遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)	5
第3図 箕崎土地区画整理事業地内調査区位置図(1/3,000)	(折り込み)
第4図 5区調査区位置図(1/1,000)	8
第5図 5区全体図(1/150)	(折り込み)
第6図 5区北壁および西壁土層実測図(1/100)	9
第7図 SE1402実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	10
第8図 SE1407実測図(1/40)	11
第9図 SE1407出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	12
第10図 SE1407出土遺物実測図(2)(1/4)	13
第11図 SE1407出土遺物実測図(3)(1/4)	14
第12図 SE1410実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	15
第13図 SE1412実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	16
第14図 SE1425実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	17
第15図 SK1406・1409・1413・1419実測図(1/40)	18
第16図 SK1406・1409・1413出土遺物実測図(1/3)	19
第17図 SK1419出土遺物実測図(1/3)	20
第18図 SK1420・1421・1422・1423・1424実測図(1/40)	21
第19図 SK1420・1421・1422・1423出土遺物実測図(1/3)	22
第20図 SK1424出土遺物実測図(1/3)	23

第21図 SK1426・1427・1468・1501・1508・1521・1524・1581実測図(1/40) .....	25
第22図 SK1426出土遺物実測図(1/3) .....	26
第23図 SK1427・1468・1501・1508・1521出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	28
第24図 SK1524・1581出土遺物実測図(1/3) .....	29
第25図 SD1401・1403・1404・1408・1414・1415・1416・1418実測図(1/40) .....	30
第26図 SD1401・1403・1404・1414・1418出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4) .....	31
第27図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図(1/1、1/3、1/4) .....	33

## 図版目次

巻頭図版 箱崎遺跡第22次調査5区と筥崎宮(東上空から)

図 版 1 (1) 5区全景(上空から)	(2) 5区と箱崎地区(南西上空から)
図 版 2 (1) SE1402(西から)	(2) SE1407(東から)
(3) SE1407井筒(東から)	(4) SE1410(東から)
(5) SE1412(南から)	(6) SE1425(東から)
図 版 3 (1) SK1406(北から)	(2) SK1413(南から)
(3) SK1419(南から)	(4) SK1421(南から)
(5) SK1422(西から)	(6) SK1423(西から)
図 版 4 (1) SK1424(北から)	(2) SK1426(東から)
(3) SK1427(北西から)	(4) SD1401土層(東から)
(5) SD1401・1408土層(東から)	(6) SD1403(東から)
図 版 5 (1) SD1403土層(西から)	(2) SD1404土層(西から)
(3) SD1414土層(西から)	(4) SD1415・1416土層(西から)
(5) SD1418土層(西から)	(6) SD1418土層(西から)
図 版 6 出土遺物	

## 表目次

第1表 箱崎遺跡調査一覧表 .....	4
第2表 箕崎土地区画整理事業地内調査一覧表 .....	6

## I.はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市土木局筥崎連続立体開発事務所換地課長より平成6(1994)年8月24日付、土管第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛てに東区馬出・箱崎・筥松、博多区吉塚本町における福岡都市計画事業筥崎地区画整理事業(事業面積: 27.8ha)に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた(事前審査番号: 7- 1- 50)。

同事業は、平成4年1月17日に都市計画決定が行われ、同年9月14日の事業計画決定がなされた。その事業目的は、東区の中心地域として位置付けられている箱崎地区の道路や公園等の公共施設の未整備や、土地細分化や家屋密集等による市街地環境の低下、また道路と鉄道(JR鹿児島本線・篠栗線)の平面交差による踏切事故や慢性的交通渋滞等の問題を解消するため、地区画整理による総合的なまちづくりを行なうことで、都市計画道路等の整備・改善や鉄道高架による道路との立体交差化、またその高架事業に伴うJR箱崎駅の移設を実施し、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るものである。

埋蔵文化財課では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成6年9月14日より建物移転の終了した箇所を対象に試掘調査を順次開始した。なお、事業面積が広範なことや一部の建物移転交渉が難航したことにより、試掘調査は現在まで継続して行っている。これまでの試掘調査の結果、中世を主体とする遺構が、東側はJR鹿児島本線、西側が事業地西端の都市計画道路 堅粕・箱崎線(通称: 炙見通り)、北側がJR(新)箱崎駅西口広場付近、南側が事業地南端の範囲、面積約35,000m<sup>2</sup>において確認できた(第3図参照)。この試掘結果をもとに両課は、当該地の埋蔵文化財保存を前提とした協議を行ったが、1号公園部分(事業面積: 2,500m<sup>2</sup>)を除き、事業計画上、遺構の破壊が回避できないことが判明したため、平成11年度から本調査を、また平成14年度から資料整理・調査報告書作成を継続して行うこととなった(第2表参照)。なお、これらに係る費用は事業主体である土木局筥崎連続立体開発事務所が負担した。

### 2. 調査の組織

調査委託: 福岡市土木局 箕崎連続立体開発事務所

調査主体: 福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査総括: 埋蔵文化財課長 山崎純男(前任) 山口譲治(現任)

同課調査第2係長 力武卓治(前任) 池崎謙二(現任)

調査庶務: 文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

調査担当: 同課調査第2係 櫻本義嗣(現 同部文化財整備課整備係)

調査作業: 金子國雄 清田厚巳 熊本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 高崎秀巳 原勝輝  
米倉國弘 石橋テル子 金子澄子 唐島栄子 草場恵子 小林スエ子 近藤澄江  
酒井康恵 坂田ミネ 杉村百合子 田崎アヤ子 辻美佐江 永松トミ子 本郷満子  
村田敬子 吉村智子

上田龍児(福岡大学学生) 西田絵美 渡邊誠(以上九州大学学生)

梅田隆憲 大平有一 矢野愛二(以上九州産業大学学生)

整理作業: 西島信枝 松尾真澄 小林由美 松本奈美(以上中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで土木局筥崎連続立体開発事務所をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

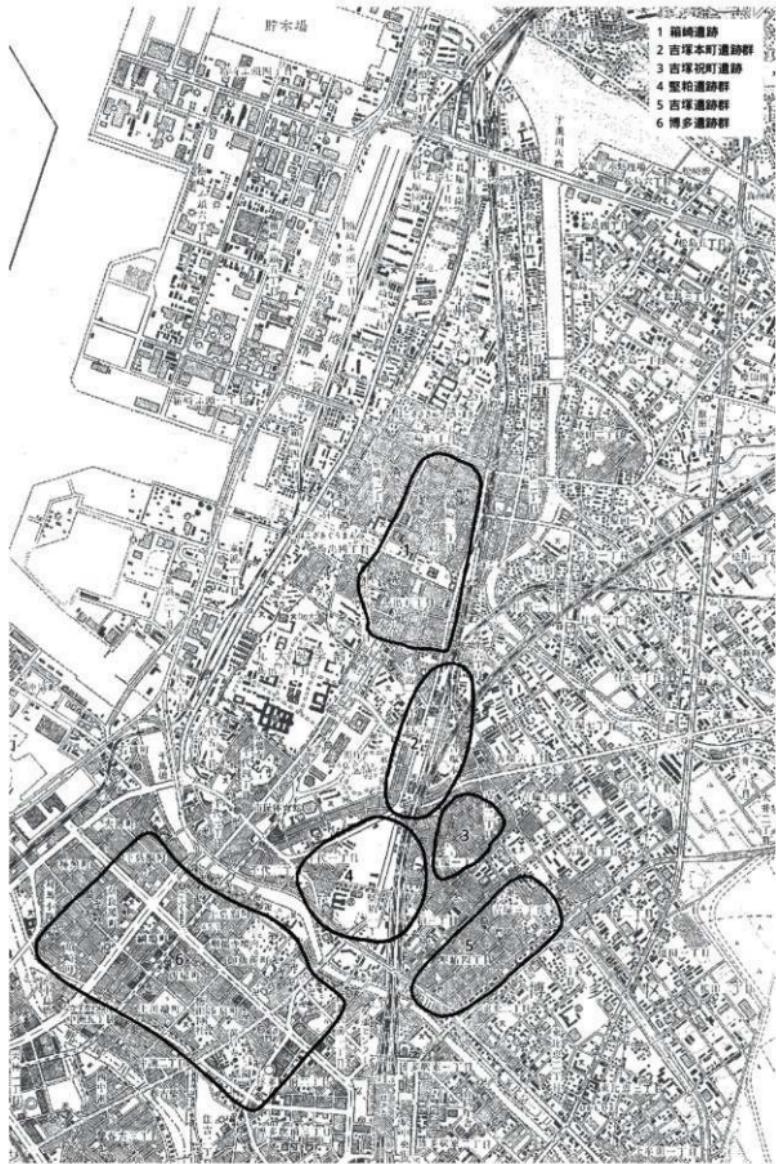
## II . 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については遅くとも繩文時代晚期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第1図に示した範囲で、北側から箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて入り江が博多湾から湾入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。

第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。遺跡北東端部で実施された第10次調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、筥崎宮境内、第2次調査区付近までほぼ南北方向に延伸する。砂丘尾根は遺跡南半部では東側に大きく振れるため、砂丘の西側には広い緩斜面が形成される。また、遺跡南東部の第26次調査8区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。該地付近には昭和初期まで水路が遺存していたことからも、從来低地であったと考えられる。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査4区および第26次調査6区付近には標高約3.5mを測る等高線が認められ、更に南側に延伸するものと考えられるが、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側斜面は殆ど認められない。なお、現在のところ砂丘南西端部の微地形は調査例が少なく不明瞭である。

同図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顕著な堆積物が確認されている。第10次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができ。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列も確認されている。東限については、今回報告する筥崎土地区画整理事業に伴う試掘調査が現在も継続して行なわれてあり、JR鹿児島本線に沿うラインが該当する可能性が高い。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高く、第40次調査19区においても古墳時代以降の遺構が検出されている。また、北側では第36次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても從来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。該地におけるより詳細な旧地形の解明および遺跡範囲の確定は今後の調査課題の一つといえよう。

本遺跡の発展の契機となった歴史的事象としては筥崎宮の創建をまず挙げることができる。同宮は延長元年(923)に穗波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。永承6年(1051)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延6年(1140)には一時大宰府の府領となつた。しかし、文治元年(1185)には再び石清水八幡宮からの補任がなされた。この間、仁平元年(1151)には大宰府核非連所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追捕を行っている。これを記した『宮寺縁事抄』には両地区に宋人が在住していたことや1,600軒以上の家屋が存在したことが記述されており、日宋貿易に間に与した宋商人の家屋を含む町が既に該地に形成されていたことを裏付ける。文永11年(1274)の元寇(文永の役)の際には筥崎宮が焼失したことが伝えられており、同地区一帯も被災した可能性が高い。なお、元の再度の襲来に備え、建治2年(1276)、箱崎地区の海岸線に薩摩国との分担によって元寇防壁が築かれる。至治3年(1323)に



第1図 箱崎遺跡位置図(1/25,000)

沈没したことが判明している韓國新安沖の沈没船からは「筥崎宮」銘の木簡が出土しており、同宮は該期においても引き続き日本の大陸交易拠点の一つとして位置付けられる。以後の中世後半期においても『海東諸國紀』や『筑紫道記』、『宗湛日記』等に箱崎の地名が散見され、海上交通の要所や箱崎松原に代表される名勝地としてもその名を残している。

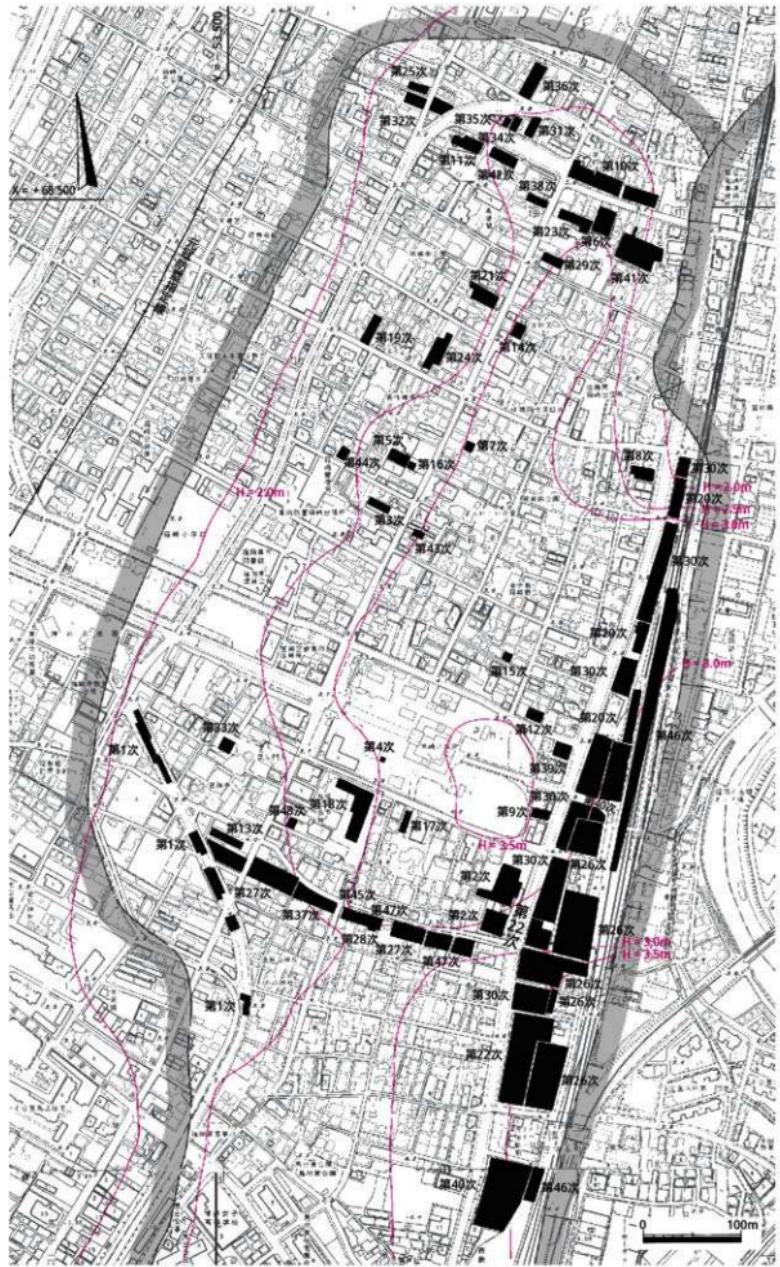
箱崎遺跡では現在までに45次の調査が実施されている(第1表・第2図)。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第6次調査出土の磨製石斧や第20次調査出土の刻目直帯文土器の模片があるが、後世の遺構からの出土である。また、同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片も散見される。今後の調査において稀少であろうが、該期の遺構が確認される可能性がある。なお、現在のところ最も時期の遅い遺構としては本報告第22次調査の弥生時代後期の土坑がある。焼く古墳時代では第8次・20次・22次・26次・30次・40次調査等において竪穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。これらは前期を主体とするが、中期・後期の遺構・遺物も散見される。なお、第40次調査では砂丘上に築造された5世紀代の円墳が確認されている。これらはいずれも砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択したことが看取される。その後、数世紀の断絶が認められるが、筥崎宮創建時の10世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第2次・22次・26次・30次・40次調査区において確認されている。先に述べた砂丘鞍部の在り方等を勘案すると、その具体的な位置は不詳であるが、前述した港湾施設がこれら調査区の東側に存在する可能性が示唆される。11世紀代では前代のやや拡大した範囲において該期の遺構が確認され、これらは尾根線および東側緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構が密度をもって存在することから中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは西側緩斜面の利用も開始され始め、12世紀後半には遺跡の広範囲に集落が展開する。13世紀以降もほぼ全域に集落が確認されているが、海側西側斜面を積極的に生活の場として活用している。第11次・14次・21次・24次・42次・44次調査では重層的な調査が実施され、上面で13世紀、14世紀、下面において12世紀、13世紀の遺構が検出されている。中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。第13次調査では短冊形の地割を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

#### <参考文献>

- ・小林茂二編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1998年
- ・川添昭二編『よみがえる中世1 東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988年

調査次	調査年度	主な遺構の時期	概 文	調査次	調査年度	主な遺構の時期	概 文
第1次	1983	12世紀後半 - 13世紀	『高通寺遺跡』、市報第13号(1983)	第25次	2001	15世紀 - 16世紀	『箱崎2号古墳』市報第63号(2001)6-7・10
第2次	1986	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎遺跡』、市報第16号(1987)	第26次	2001	古墳時代後半 - 10世紀 - 15世紀	『箱崎3号古墳』市報第63号(2001)7-8
第3次	1989	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎遺跡』、市報第19号(1991)	第27次	2001	11世紀後半 - 15世紀	『箱崎4号古墳』市報第63号(2001)
第4次	1991	11世紀	市報第4号(1991)	第28次	2001	15世紀 - 16世紀	『箱崎5号古墳』市報第63号(2001)
第5次	1991	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎6号古墳』市報第10号(1991)	第29次	2002	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎6号古墳』市報第63号(2001)
第6次	1994	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎7号古墳』市報第13号(1996)	第30次	2002	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎7号古墳』市報第63号(2001)
第7次	1994	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎8号古墳』市報第13号(1996)	第31次	2002	12世紀後半 - 12世紀	『箱崎8号古墳』市報第63号(2001)
第8次	1996	10世紀代前半、12世紀中 - 13世紀	『箱崎9号古墳』市報第15号(1996)	第32次	2002	13世紀後半 - 14世紀前半、13世紀 - 18世紀	『箱崎9号古墳』市報第63号(2001)
第9次	1996	11世紀	市報第16号(1996)	第33次	2002	13世紀後半 - 14世紀	『箱崎10号古墳』市報第63号(2001)
第10次	1996	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎11号古墳』市報第16号(1996)	第34次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎11号古墳』市報第63号(2001)
第11次	1997	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎12号古墳』市報第17号(1996)	第35次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎12号古墳』市報第63号(2001)
第12次	1997	11世紀	『箱崎13号古墳』市報第17号(1996)	第36次	2002	12世紀後半 - 15世紀	『箱崎13号古墳』市報第63号(2001)
第13次	1997	12世紀	『箱崎14号古墳』市報第18号(1996)	第37次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎14号古墳』市報第63号(2001)
第14次	1998	12世紀後半 - 14世紀前半	『箱崎15号古墳』市報第19号(2000)	第38次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎20号古墳』市報第63号(2001)
第15次	1998	11世紀後半 - 12世紀	『箱崎16号古墳』市報第20号(2000)	第39次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎21号古墳』市報第63号(2001)
第16次	1998	12世紀後半 - 15世紀	『箱崎17号古墳』市報第20号(2002)	第40次	2003	古墳時代、10世紀 - 15世紀	『箱崎22号古墳』市報第63号(2001)
第17次	1998	12世紀後半 - 16世紀	『箱崎18号古墳』市報第20号(2002)	第41次	2003	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎24号古墳』市報第63号(2001)
第18次	1999	12世紀後半 - 16世紀	『箱崎19号古墳』市報第21号(2003)	第42次	2003	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎25号古墳』市報第63号(2001)
第19次	1999	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎20号古墳』市報第21号(2003)	第43次	2003	12世紀後半 - 12世紀	『箱崎26号古墳』市報第63号(2001)
第20次	1999	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎21号古墳』市報第22号(2003)	第44次	2002	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎27号古墳』市報第63号(2001)
第21次	2000	12世紀中 - 14世紀	『箱崎22号古墳』市報第22号(2003)	第45次	2003	12世紀後半 - 13世紀	『箱崎28号古墳』市報第63号(2001)
第22次	2000	12世紀後半 - 15世紀	『箱崎23号古墳』市報第23号(2004)	第46次	2003	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎29号古墳』市報第63号(2001)
第23次	2000	12世紀 - 13世紀	『箱崎24号古墳』市報第63号(2005)5区	第47次	2004	11世紀 - 15世紀	『箱崎30号古墳』市報第63号(2001)
第24次	2000	12世紀 - 13世紀	『箱崎25号古墳』市報第70号(2002)	第48次	2004	12世紀 - 15世紀	『箱崎31号古墳』市報第63号(2001)
第25次	2000	12世紀後半 - 14世紀	『箱崎26号古墳』市報第70号(2003)				

第1表 箱崎遺跡調査一覧表



第2図 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する第22次調査区は、東区馬出5丁目および同区箱崎1丁目地内に所在し、箱崎遺跡の立地する古砂丘の西側緩斜面上に位置している。今回の発掘調査区は第3図・4図に示すとおり、2地点に分れており、南側を4区、北側を5区と呼称した。これは第2表のとおり、菅崎土地区画整理事業に伴う発掘調査の調査区呼称については、調査次数に関らず、調査着手順に通し番号としており、平成11年度に行なった同事業に伴う初年度の調査である第20次調査1区～3区に継続し、4区・5区としたものである。

なお、本報告書は北側の5区を報告対象とし、南側の4区については、『箱崎17—箱崎遺跡第22次調査報告(1)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集)として2004年に報告書の刊行を行っている。

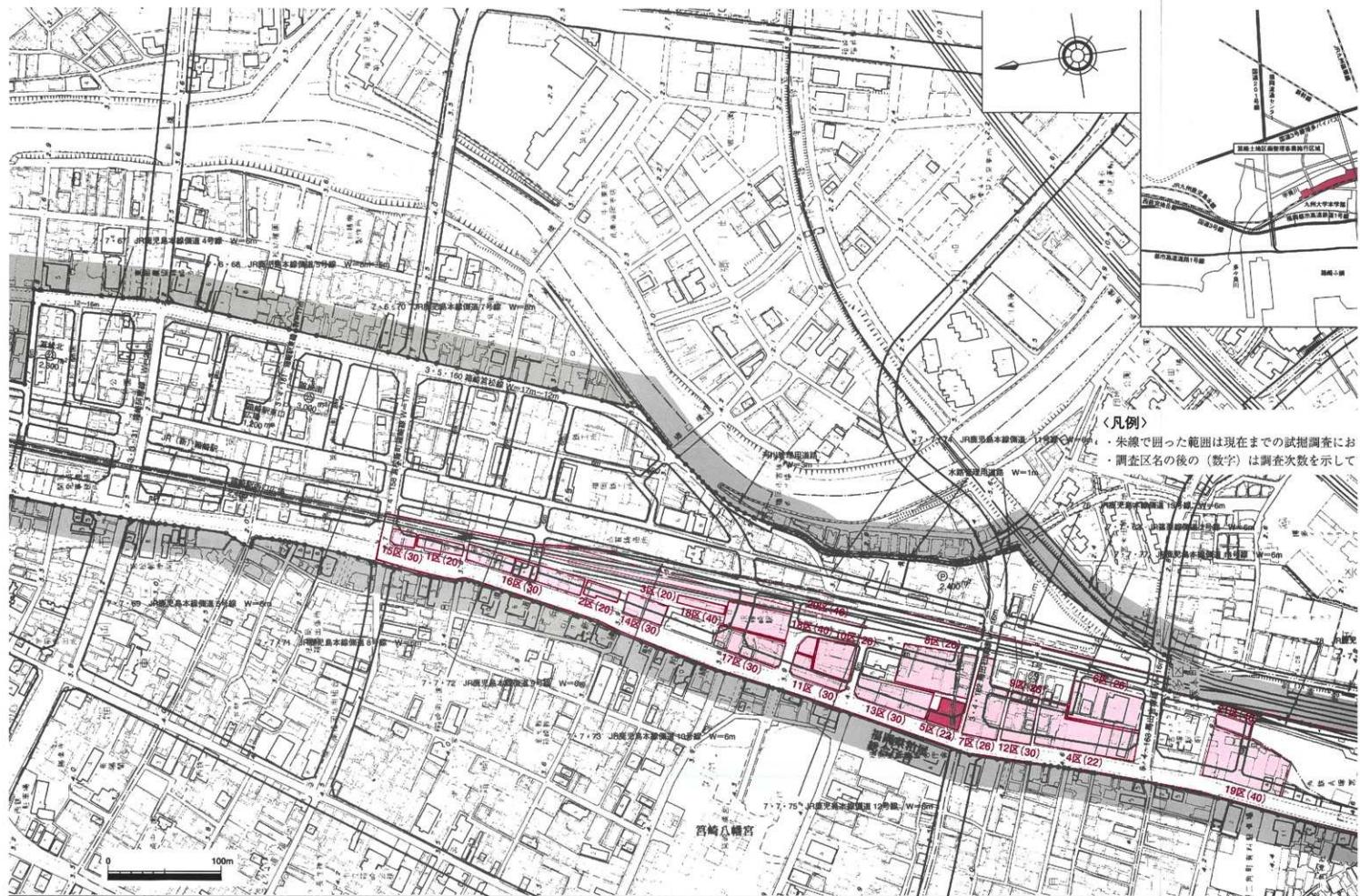
第22次の発掘調査は、平成12(2000)年7月24日、重機による4区の表土剥ぎ取りから開始した。その後、同区の最終作業と並行しながら、5区の表土剥ぎ取りを平成13年1月22日に着手し、全調査を同年4月18日に終えた。両調査区での調査総面積は2,976m<sup>2</sup>である。

調査時の遺構番号は、0001から4桁の通し番号を遺構の種別に閑らす付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、調査時には、4区では0001～1329、5区では1401～1627の遺構番号を用いた。

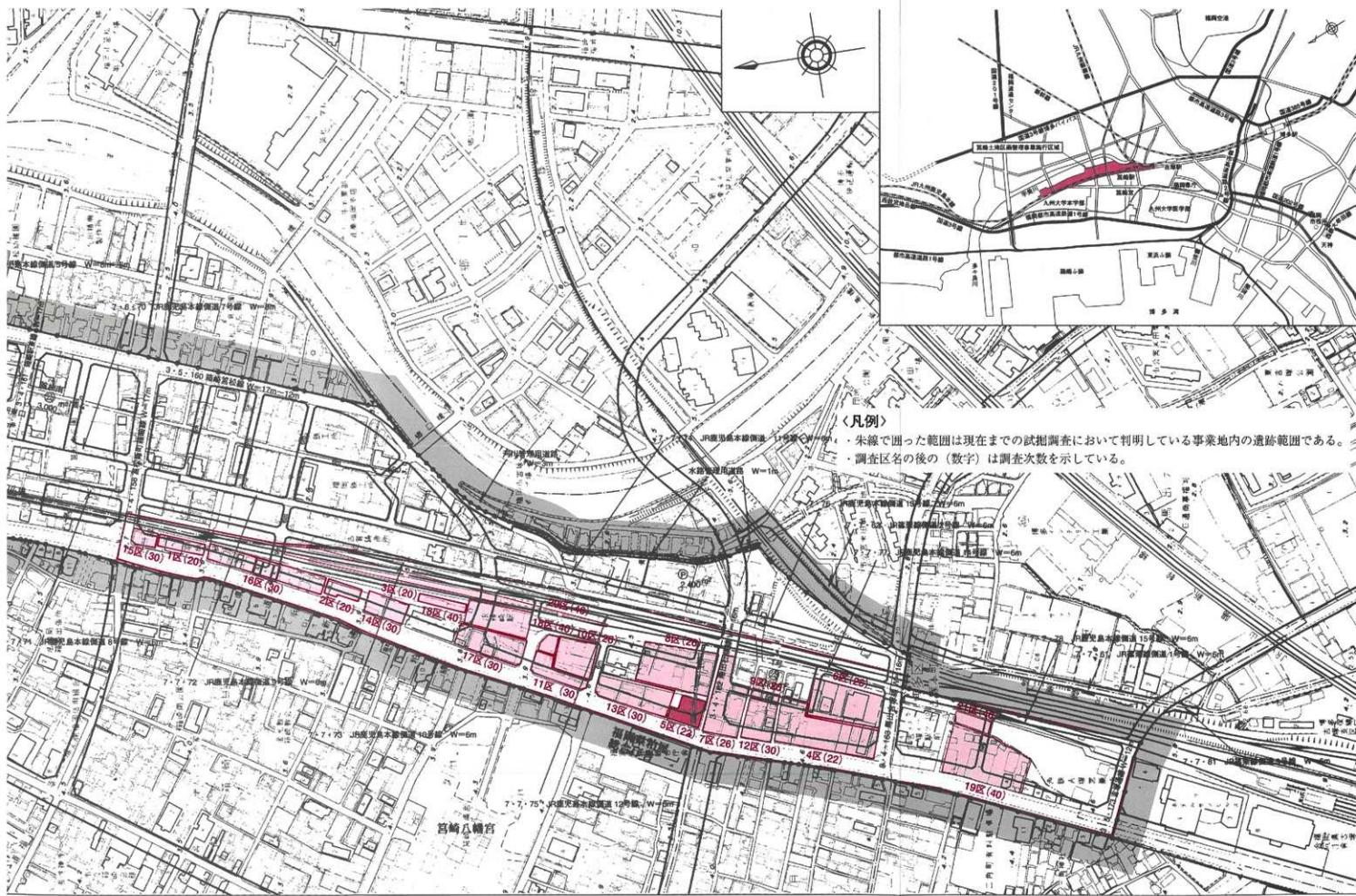
なお、同事業に伴う一連の調査では、区画整理という事業の性格上、施工後には街区や道路形態が現況と大きく変化するため、国土座標(第II座標系)による調査区の管理を行っている。

調査年度	調査次数 (いすれも 箱崎遺跡)	調査番号	調査区名	調査面積	報文
1999(平成11) 年 度	第20次	9959	1区	254m <sup>2</sup>	『箱崎 14a 市報第 767集(2003)』
			2区	300m <sup>2</sup>	
			3区	328m <sup>2</sup>	
2000(平成12) 年 度	第22次	0022	4区	2,473m <sup>2</sup>	『箱崎 17a 市報第 811集(2004)』 本報告
			5区	503m <sup>2</sup>	
2001(平成13) 年 度	第26次	0108	6区	1,180m <sup>2</sup>	『箱崎 21a 市報第 815集(2004)』
			7区	1,296m <sup>2</sup>	
			8区	1,859m <sup>2</sup>	『箱崎 23a 市報第 853集(2005)』
			9区	100m <sup>2</sup>	
			10区	820m <sup>2</sup>	『箱崎 21a 市報第 815集(2004)』
			11区	542m <sup>2</sup>	
2002(平成14) 年 度	第30次	0210	12区	715m <sup>2</sup>	2005年度刊行予定
			13区	1,203m <sup>2</sup>	
			14区	450m <sup>2</sup>	
			15区	208m <sup>2</sup>	
			16区	1,279m <sup>2</sup>	
			17区	600m <sup>2</sup>	
			18区	1,000m <sup>2</sup>	
2003(平成15) 年 度	第40次	0318	19区	2,167m <sup>2</sup>	2006年度刊行予定
			20区	5,605m <sup>2</sup>	
2004(平成16) 年 度	第46次	0434	21区	273m <sup>2</sup>	2007年度刊行予定

第2表 菅崎土地区画整理事業地内調査一覧表



第3図 岑崎土地地区画整理事業地内調査区位置図(1/3,000)



第3図 菅崎土地区画整理事業地内調査区位置図(1/3,000)

## 2. 5区の調査

### 1) 概要

第22次調査5区は、東区箱崎1丁目2番および馬出5丁目22番地内に所在し、箱崎遺跡の南東部に位置する。調査前の状況は、個人住宅や事務所等の解体後の平地であった。本区の周辺は、調査が進んでおり、東側には第26次調査8区、北側には第30次調査13区、南側には第26次調査7区の各調査区が隣接し、また西側の道路を隔てた福岡県粕屋合同庁舎においては、第2次調査が実施されている。

本調査区の土層(第6図北壁・西壁土層参照)は、攪乱によりプライマリーな堆積層が分断される箇所が多いが、北壁の中央部から東側では比較的良好に層序が観察し得る。表層(北壁1層)は、客土層で、西壁2-a層と同一層である。その下層には炭化物や土器片を含む暗灰褐色砂質土(北壁2層)がほぼ水平に堆積し、その下位には、淡茶褐色砂質土(北壁3層)が認められ、基盤の黄褐色の砂丘砂上には、厚さ10数cm程度の黄褐色砂質土混じりの明茶褐色砂質土が堆積している。北壁の砂丘面は、標高2.8~2.9m前後を測り、凹凸があるものの、砂丘の大きな傾斜は看取できない。また、西壁での砂丘面の標高は、北側で約3m、南側では、2.7m前後を測り、緩く南側へ傾斜する。なお、遺構の検出作業は主に砂丘基盤である黄褐色砂上面で行ったが、土層観察によると、遺構の大半はその上層(北壁4~6層、西壁3~7層)から掘り込まれている。

本調査区で検出した主な遺構は、古代末から中世の井戸5基、溝8条、土坑やピット多数であるが、西側を主体に攪乱が多く、遺構が分断されている。また、南端部には、埋め込まれた東西方向の近代の旧水路が横断していた。

本区の発掘調査は、先述したとおり、4区の作業と並行しながら、平成13(2001)年1月22日、重機による表土剥ぎ取り作業から開始した。なお、設定した調査区の南側に位置する東西方向の既存道路下に埋設された水道管および下水道管撤去作業の遅れから、北側部分を先行して、表土剥ぎ取りを実施した。その後、4区の最終作業の間に、レベル移動や座標測量を行い、2月5日より人力作業を開始した。また、埋設管の撤去作業終了後、3月7日・8日に再度重機を投入し、南側の表土剥ぎ取りを行った。全体の調査作業が終了した4月12日に、空中全体写真を撮影し、同月18日の重機による埋め戻し作業終了をもって5区の調査を全て完了した。なお、本調査区の調査面積は503m<sup>2</sup>である。

前述したが、第22次調査の遺構番号は、0001から4桁の通し番号を遺構の種別に間ならず付している。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、5区では1401~1627の遺構番号を用いた。

また、調査区内での遺構位置を本文中に示す際には、調査時における座標軸を基準とした10m単位の英字(西から東方向にA、B、・・)と数字(北から南方向に1、2、・・)を組み合わせたクリップ表記(第5図参照)を用いる。

### 2) 遺構と遺物

#### (1) 井戸(SE)

総数5基の井戸を検出した。うち3基では、木桶や丸太割り抜き材を用いた水溜を確認し得た。

SE1402(第7図) 調査区北西端のA・B-2区で検出した井戸で、南側をSD1401に切られる。また、遺構の西側は、調査区外に位置している。平面プランは、現況で東西方向に長い橢円形を呈するものと考えられ、長径2.5m以上、短径2.6mを測る。覆土は、暗黄茶褐色砂を主体とし、灰褐色

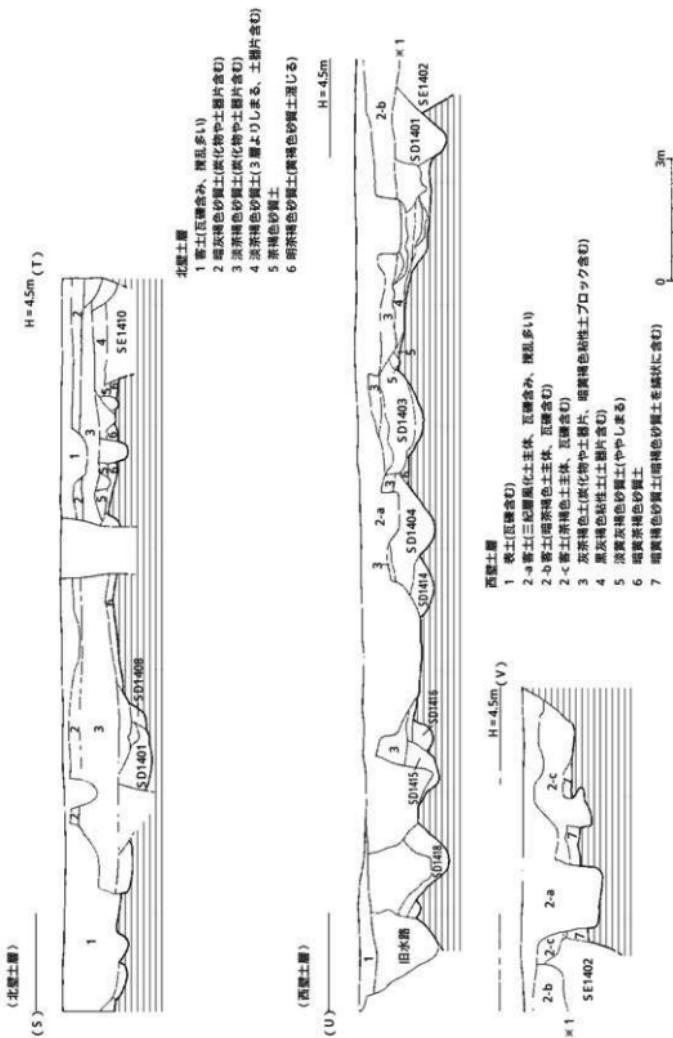


第4図 5区調査区位置図(1/1,000)



第5図 5区全体図(1/150)

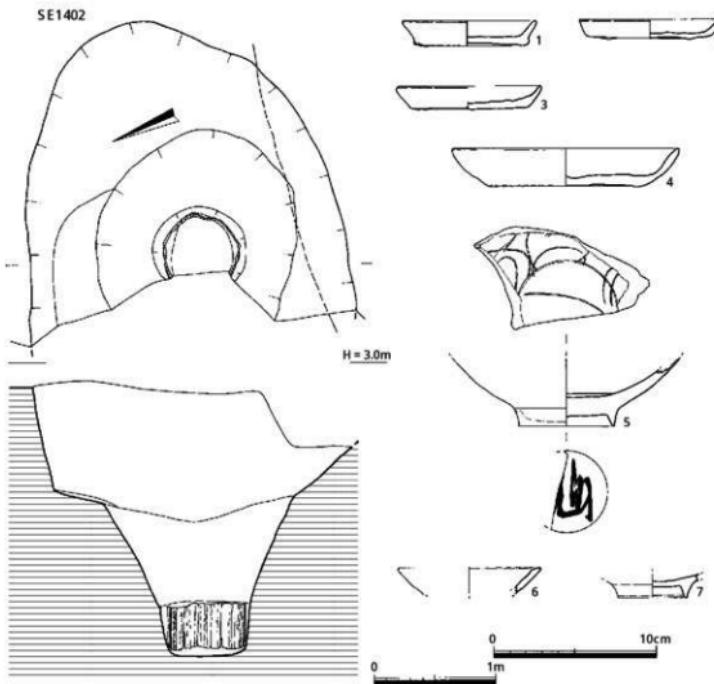
第6図 5区北壁および西壁土壤実測図(1/100)



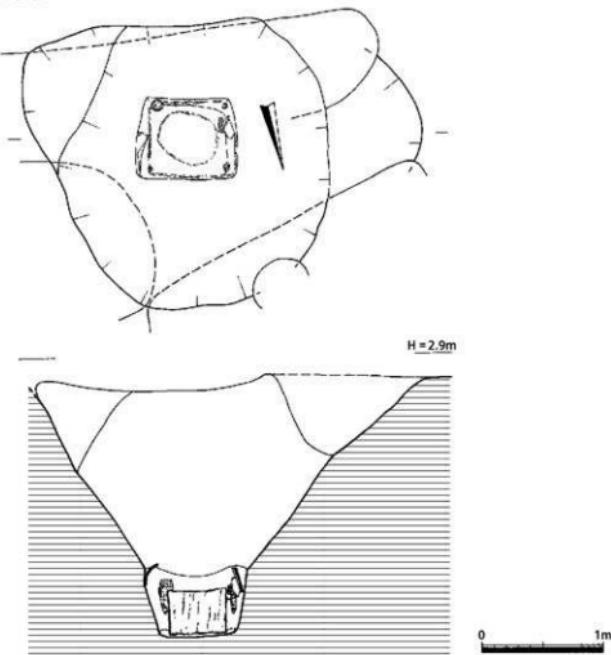
粘性砂質土のブロックを多量に含み、中央の井筒部分は、粘性の強い灰褐色砂質土を呈する。検出面からの深さ約1mの北側部分には、平坦面を設け、井筒の下部を据えるための径約1.7m、深さ約1.2mの円形の掘り込みを有する。その内部の底面上では、幅10cm前後、厚さ数cmの板材を用いた径約60cmの木桶が、高さ約40cm程度遺存していた。底面の標高は、0.6mを測り、湧水は認められなかった。なお、上面からの深さは、約2.2mを測る。

出土遺物(第7図) 1~3は土器器皿で、径は8.3~8.9cmを測る。3は器面の風化が著しいが、1・2の外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。4は復元口径14.0cmを測る回転糸切り底の土器器皿で、板状圧痕はない。5は白磁碗VII-b類で、内面にはヘラ状工具による花文を有し、見込みには沈線が巡る。灰白色の釉が、高台際まで施される。また、外底部には墨書きが認められる。6は口禿げの白磁皿で、IX-1aもしくはIX-2類である。復元口径は8.6cmを測る。7は龍泉窯系青磁杯皿類で、高台端部は先細りし、露胎となる。他に瓦質土器や中国陶器等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SE1407(第8図) B-2・3区に位置する井戸で、SD1403や土坑、搅乱に上部を切られる。そのため、平面プランは不明確であるが、現況からは、隅丸方形気味の不整な円形を呈するものと考



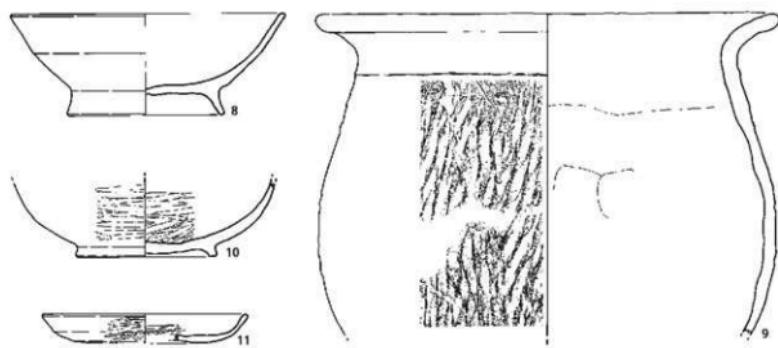
第7図 SE1402実測図(1/40)および出土物実測図(1/3)



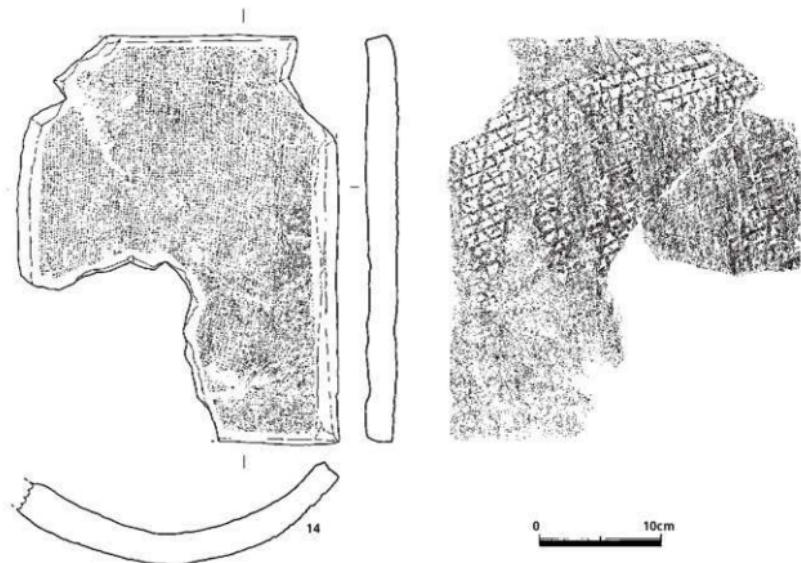
第8図・SE1407実測図(1/40)

えられ、径は2.3~3.0mを測る。壁面中位の一部には、段が認められ、更に上面からの深さ1.5mには、井筒の下部を据えるための一辺0.65~0.8m、深さ0.55mを測る方形の掘り込みが確認できた。その内部の構造は、角杭と推測される柱を四隅に設置し、その外周には縦板材を並べるが、大半が腐食し、木質の痕跡をとどめる箇所が多い。横桟材は確認できなかった。また、壁面際の上部には、これらの固定を図るために平瓦片3点(うち、図化分は第9図14~第11図19)が置かれていた。なお、中央部には、水溜として、土圧により垂むものの、径40~50cmを測る丸太割り抜き材が据え付けられていた。いずれの木質も遺存状況は不良である。底面の標高は、0.6mを測り、湧水は認められなかった。上面から底面までの深さは、2.0mである。

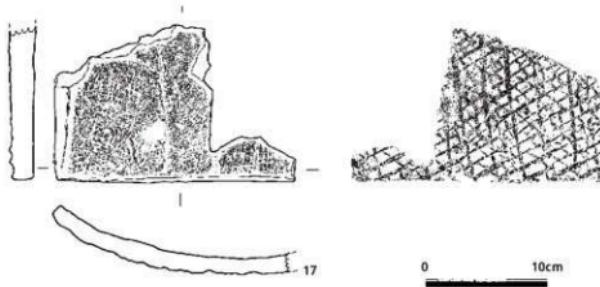
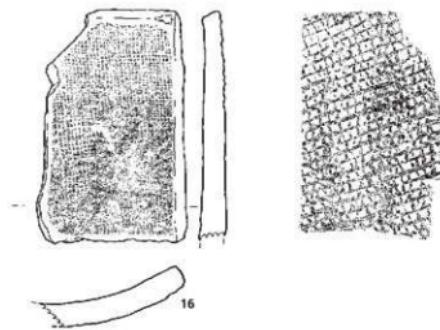
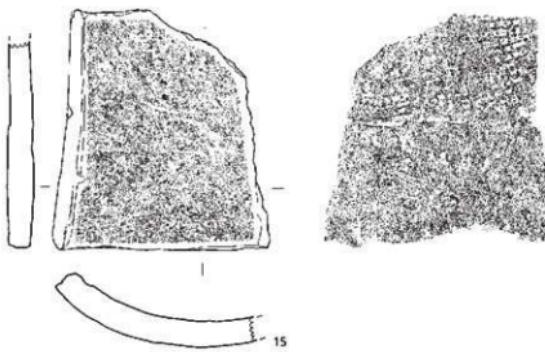
**出土遺物(第9~11図)** 8は土師器椀で、直線的な体部内外面にはヨコナデを加える。9は復元口径27.6cmを測る土師器甕である。体部外面には、木目直交の太い平行叩きを施し、内面には当て具の凹凸が残る。大きく外反する口縁部の内外面にはヨコナデを加えている。10・11は黒色土器B類で、共に体部内外面にはヘラ研磨を行う。10は椀で、低い高台を貼付する。11は復元口径12.6cmの皿である。12・13は越州窯系青磁碗である。12はII-2 b類で、上げ底状の高台の外底部にはナデを加える。外面の下半は露胎である。見込みには環状に目跡が残る。胎土には、黒色の粒子が多く含まれる。13は碗I-2 aウ類で、全面に暗黄緑色の釉が掛けられる。輪状を呈する高台の外側



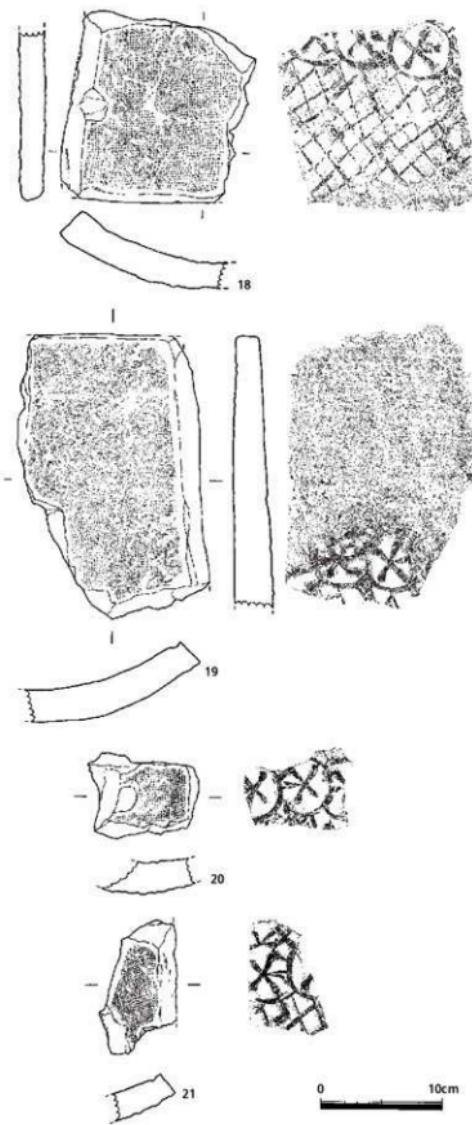
0 10cm



第9図 SE1407出土遺物実測図(1)(14は1/4、他は1/3)



第10図 SE1407出土遺物実測図(2)(1/4)

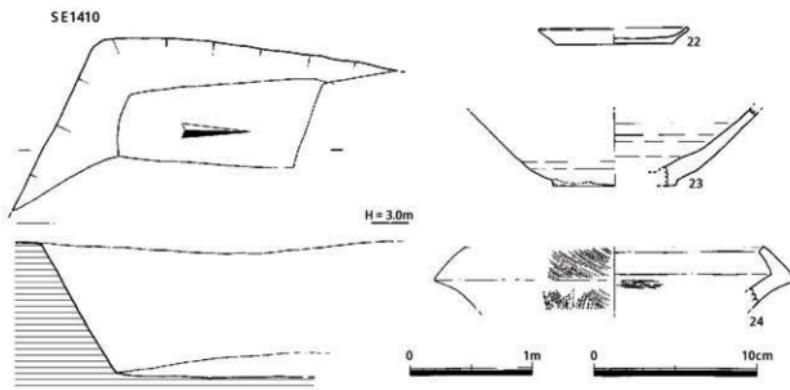


第11図 SE1407出土遺物実測図(3)(1/4)

は削る。見込みおよび高台外面には、目跡が認められる。14~21はいずれも平瓦で、凹面には布目、凸面には斜格子目の叩きを施す。16は土師質の焼成、他は須恵質である。14の凸面にはナデを加えている。15の凹面には紺痕が認められ、凸面の大半にナデを施す。15~16の斜格子目は細かい。18~21には丸囲みの「大」字銘入りの叩き具が用いられており、斜格子の枠線は細身である。文字の細かい特徴から、18~19、20~21はそれぞれ同一の叩き具によって叩打されている。また、20~21は同一個体の可能性もある。18・19にはナデを加えている。以上の出土遺物から、10世紀中頃の井戸と考えられる。

SE1410(第12図) 調査区北東隅のC-2・3区で確認した。平面規模が大きなことから、井戸として登録したが、遺構の大半は調査区外に位置するため、詳細は不明である。上面からの深さ約1mに平坦面を検出したが、井筒等は確認できていない。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第12図) 22は回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は9.0cmを測る。板状圧痕を有する。23は須恵質土器で、鉢であろう。体部の内外面にはヨコナデを施す。24は弥生土器の複合口縁型である。外面には刷毛目調整を施すが、上部にはヨコナデを加える。他に回転ヘラ切り底の土師器や瓦器、白磁碗、龍泉窯系青磁等の細片が出土している。12世紀中頃の遺構であろう。



第12図 SE1410実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SE1412(第13図) C-2・3区で検出した遺構で、SK1508・1524およびSD1403に切られる。平面プランは円形を呈し、径は3.2・3.4mを測る。上面から漏斗状にすばみ、深さは1.45mを測る。底面は隅丸方形気味のプランをなし、その標高は1.38mである。その底面上で精査を行ったが、掘り込み等は確認できなかった。水溜を検出し得た他の井戸と比較して、底面の標高が高く、掘削途中の井戸を放棄した遺構であろうか。

出土遺物(第13図) 25・27は板状圧痕を有する土師器小皿である。25・26の外底部は回転糸ヘラ切りで、復元口径は順に8.8・10.0cmを測る。27は回転糸切り底で、復元口径は9.6cmである。28は瓦器楕で、断面三角形の低い高台を貼付する。内面にはヘラ研磨を施す。29は白磁碗VI-1b類で、復元口径は12.0cmを測る。内面の下半には櫛状工具による施文を有し、中位には沈線が巡る。他に須恵質土器や瓦等の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

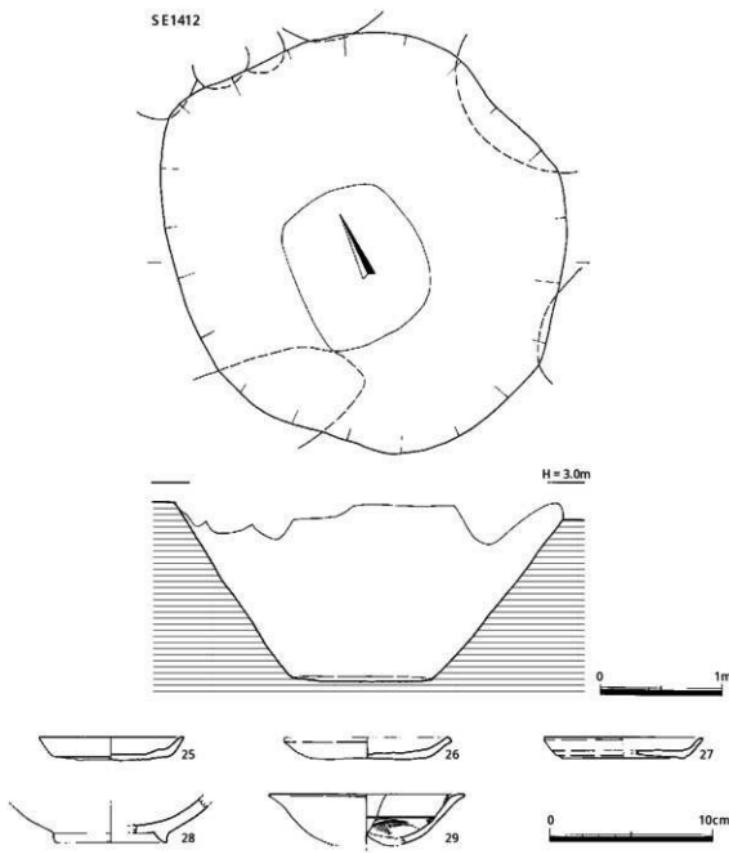
SE1425(第14図) 調査区東壁際のC-3区に位置する井戸で、SD1404・1414に切られる。東端部は調査区外に延びるが、長径3.6m、短径2.8mを測る楕円形プランを呈する。覆土は暗褐色粘性砂質土ブロックを含む茶褐色砂質土を主体とし、井筒部分は暗灰褐色粘性の砂質土である。上面からの深さ約1.5mに平坦面を設け、更に井筒の下部を据えるため、壁面西側寄りに径0.8m前後、深さ0.3mの円形の掘り込みを行っている。その内部には、木桶の板材の一部が残るが、大半は腐食が進み、木質の輪郭のみが確認できた。径60~70cmの桶と推測される。底面の標高は0.85mを測り、湧水はない。なお、上面からの深さは、1.85mである。

出土遺物(第14図) 30は玉縁状の口縁部を呈する白磁碗IV類である。31は同安窯系青磁皿I-2b類である。光沢のある淡緑色の釉が施されるが、外底部の釉は削り取る。内外面共に貫入が多い。見込みには、ヘラおよび櫛状工具による施文を有する。他に回転糸切り底の土師器や中国陶器等が出土しているが、いずれも細片である。これらの出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

## (2) 土坑(SK)

検出した土坑は、1基(SK1501)のみが古墳時代で、他は古代末から中世に位置付けられる。

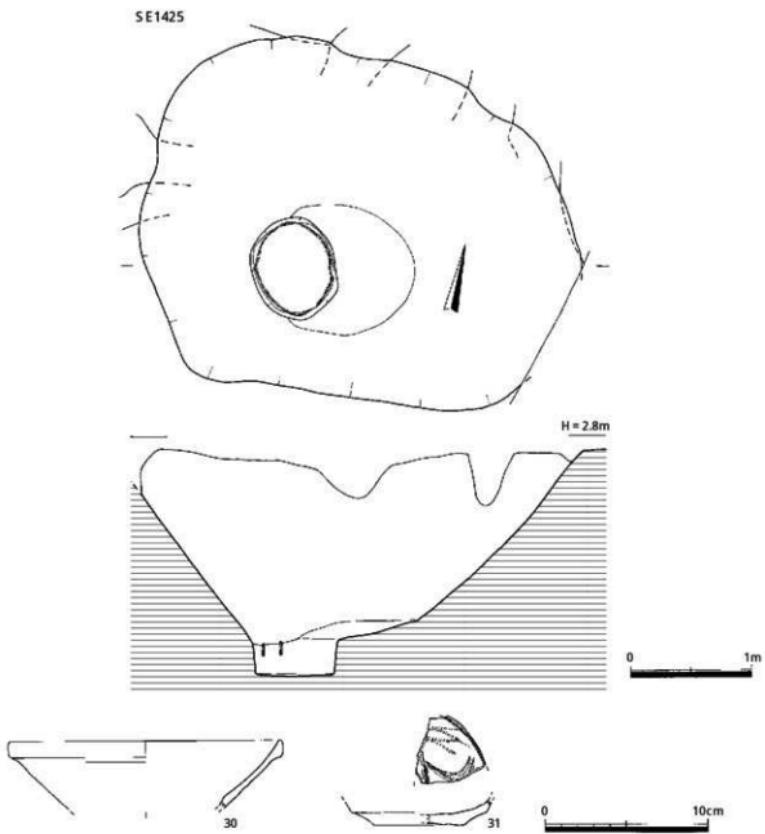
SK1406(第15図) B-2区で検出した土坑で、南西側を攪乱や他の遺構に切られるため、平面



第13図 SE1412実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

プランは不明であるが、断面は逆台形を呈し、深さ0.9mを測る。覆土はやや粘性のある灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第16図32~36) 32・33は回転糸切り底の土師器小皿で、共に板状圧痕が認められる。口径は順に9.4、9.8cmを測る。34は口径14.7cmの土師器坏で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。35は白磁碗IV-1 a類で、白濁色の釉が体部外面の上半まで施される。36は白磁皿VI-1 b類である。底部は僅かに突出し、上げ底状を呈する。見込みは平らで、体部との境界には段状の沈線が巡る。釉は黄灰色で、外面下半以下には施釉されない。他に回転ヘラ切り底の土師器や滑

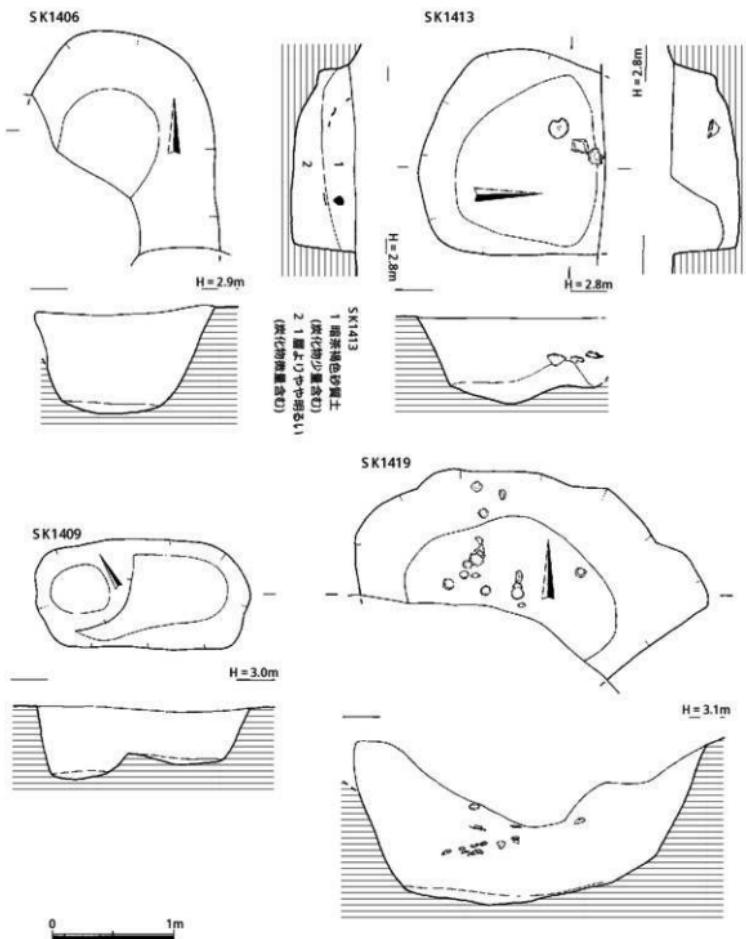


第14図 SE1425実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

石製石鍋等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK1409(第15図) 調査区の北端のC-2区に位置するやや不整な隅丸長方形の土坑で、長さ1.75m、幅0.9mを測る。東側にテラスを有し、西側に深さ0.6mのピット状の掘り込みが認められた。覆土は粘性のある灰褐色砂質土を主体とする。

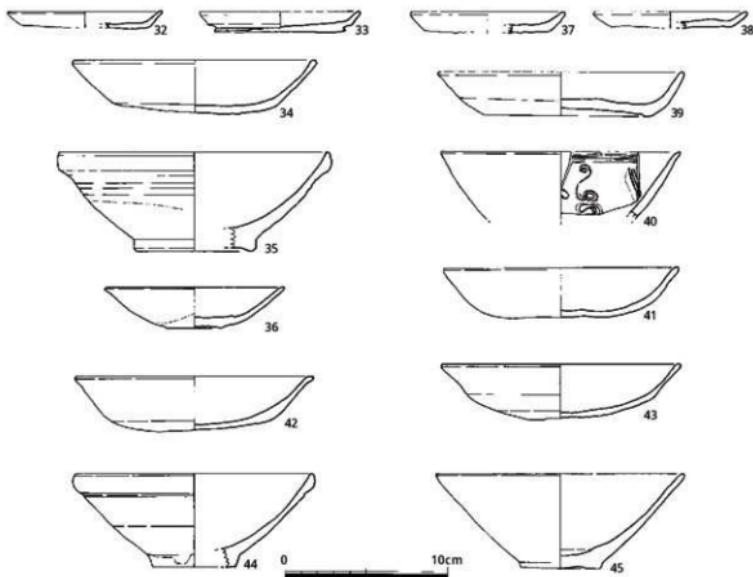
出土遺物(第16図37~40) 37・38は土師器小皿である。37は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底で、復元口径は9.4cmを測る。38の外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。復元口径は9.3cmである。39は口径15.0cmを測る回転糸切り底の土師器坏で、板状圧痕は認められない。40は龍泉窯系青磁碗I-4a類の小片である。内面には片彫りによる施文を有する。他に土師器や白磁碗IV類等の細片



第15図 SK1406・1409・1413・1419実測図(1/40)

が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK1413(第15図) 調査区の南西端のA-3・4区で確認した土坑で、SD1418を切る。また、北端部を搅乱に切られるが、壁面の立ち上がりが確認できることから、平面プランは、不整な円形もしくは方形を呈するものと考えられる。東西方向の幅は、1.7mを測る。底面には凹凸が認められ、最深の深さは0.7mである。

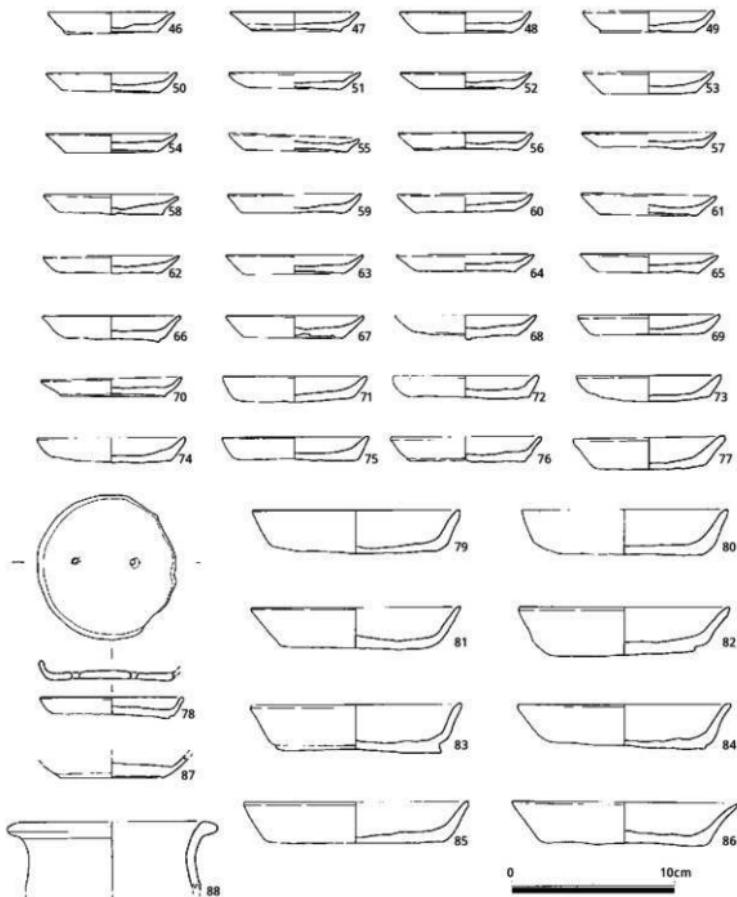


第16図 SK1406・1409・1413出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第16図41~45) 41~43は土師器丸底碗である。いずれも回転ヘラ切り底で、43を除いて板状圧痕を有する。口径は14.4~14.7cmを測る。41の内面は研磨によって平滑に仕上げている。44は玉縁状の口縁部を呈する白磁碗IV-1a類である。口縁部外面の下端は強いヨコナデによって、凹線状をなす。灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉が高台際まで施される。45は高麗青磁碗I-1類である。淡灰色を呈する胎土には、淡緑色の釉が全面に掛けられ、内外面に貫入が多く認められる。蛇目高台の疊付きには、目跡が残り、露胎となつた一部は、赤褐色を呈する。見込みは小さく、段を形成して窪む。口径15.1cm、器高5.8cmを測る。他に回転糸切り底の土師器や須質土器や二重格子目叩きの平瓦等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK1419(第15図) 調査区南端のB-4区で検出した土坑で、南側は攪乱によって切られ、調査区外に延びている。また、北側壁面の一部は、土坑によって切られる。現況での東西方向の長さは2.9m、深さは1.35mを測る。覆土は暗黄褐色砂混じりの暗灰褐色粘性砂質土を主体とし、土師器の小皿を主体とする完形に近い個体が、中層から上層にかけて出土した。

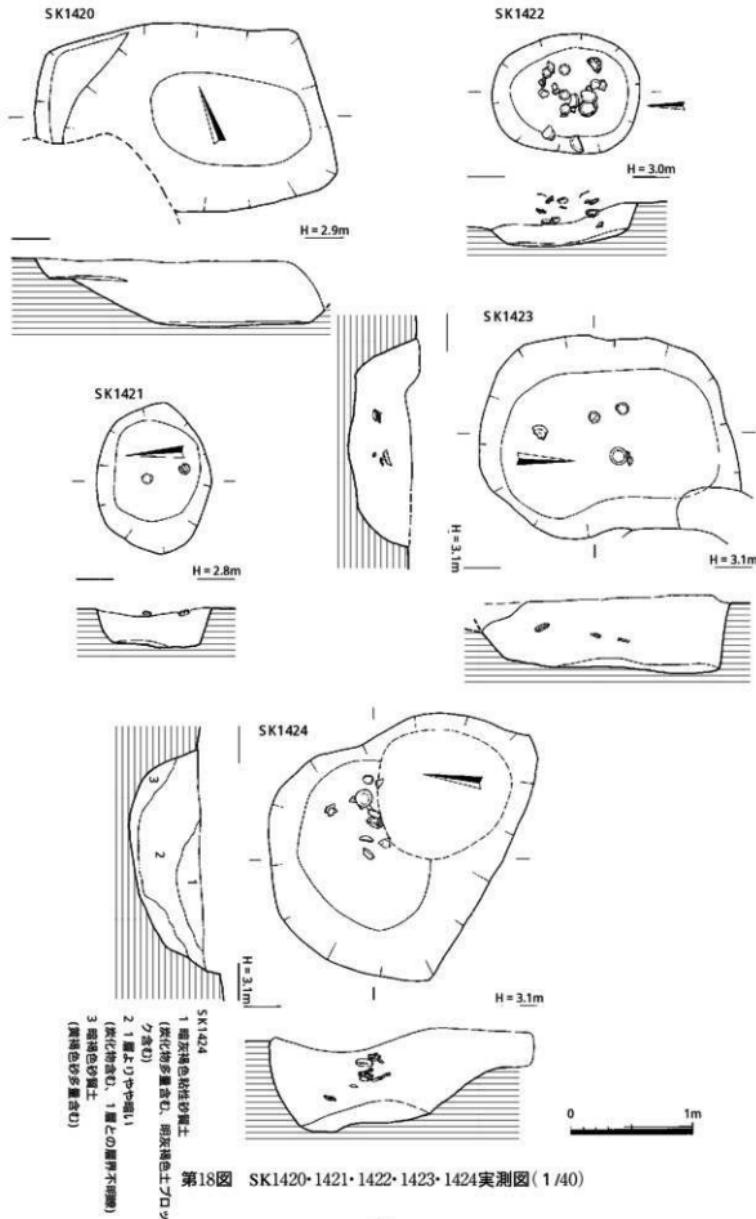
出土遺物(第17図) 46~78は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、66を除いて板状圧痕が認められる。口径は7.7~9.2cmを測り、平均は8.4cmである。胎土には金雲母片が含まれるものが多い。また、色調は赤褐色系のものと黄橙色系の二者があり、前者は薄手で、口縁部を尖り気味に収める。78の底部には、焼成後に外面から2個の穿孔が行なわれている。79~86は土師器壺である。外底部はいずれも回転糸切りで、79を除き板状圧痕を有する。口径は12.6~13.8cmで、平均は13.0



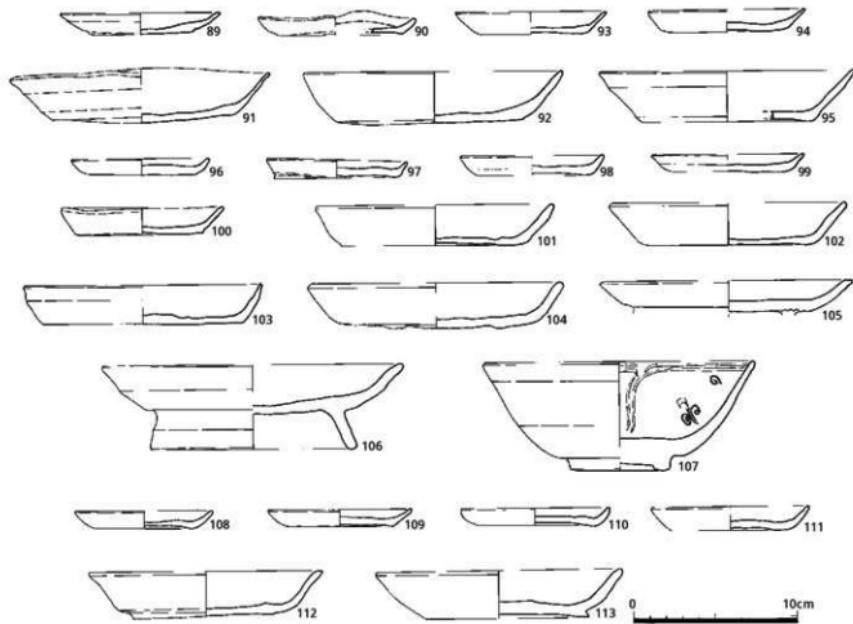
第17図 SK1419出土遺物実測図(1/3)

cmである。87は白磁皿IX-2類で、見込みには段状の沈線が巡る。体部外面の下端から底部にかけては施釉されず、明黄褐色を呈する。88は白磁壺で、灰味が強く、透明感のある釉が内外面に施される。他に須恵質土器や中国陶器、青磁等が出土している。これらの出土遺物から13世紀中頃の遺構に比定される。

SK1420(第18図) B-3区に位置する隅丸長方形の土坑で、南西コーナーから東側にかけての上部を搅乱される。現況では、長さ2.35m、幅1.55m、深さ0.5mを測り、北西側にはテラスを有す



第18図 SK1420・1421・1422・1423・1424実測図(1/40)



第19図 SK1420・1421・1422・1423出土遺物実測図(1/3)

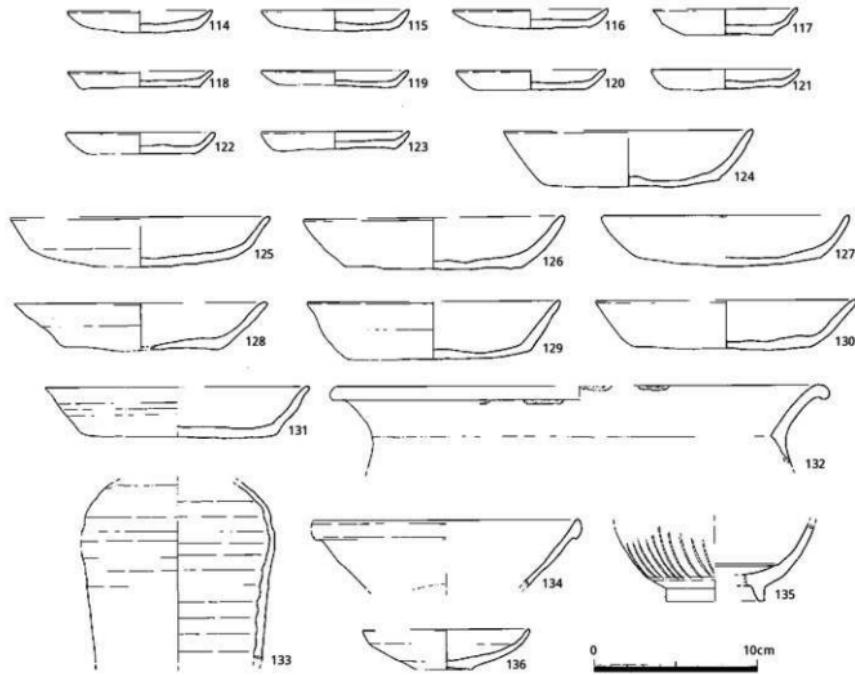
る。覆土は暗灰褐色粘性砂質土を主体とする。

出土遺物(第19図89～92) 89・90は土師器小皿で、口径は順に9.8、9.7cmを測る。外底部は89が回転ヘラ切り、90が回転糸切りで、共に板状圧痕が認められる。90は歪みが著しい。91・92は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器坏である。共に口径は15.9cmを測る。他に中国陶器や白磁、同安窯系青磁等の細片が出土した。以上から12世紀中頃の造構と考えられる。

SK1421(第18図) B-3区で検出した土坑で、SD1418を切る。平面プランはやや不整な梢円形を呈し、長径1.2m、短径0.95m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形をなし、覆土は暗灰褐色粘性砂質土を主体とする。上面付近で、土師器小皿2点(第19図93・94)が出土した。

出土遺物(第19図93～95) 93・94は土師器小皿で、口径は順に9.2、9.6cmを測る。外底部は93が回転ヘラ切り、94が回転糸切りである。94のみ板状圧痕を有する。95は板状圧痕のある回転糸切り底の土師器坏で、復元口径は15.6cmを測る。他に中国陶器等の細片が少量出土している。これらの出土遺物から、造構の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK1422(第18図) C-3区で確認した梢円形プランの土坑である。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.3mを測る。底面は北側に緩く傾斜する。覆土は黒味のある暗灰褐色砂質土を主体とする。遺物の大半は浮いた状態で上層から出土した。



第20図 SK1424出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第19図96~107) 96~100は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.5~10.0cmを測り、平均は9.1cmである。いずれも板状圧痕が認められ、ほぼ完形に近い。101~104は土師器坏で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。口径は14.6~15.6cmで、平均は14.9cmである。105~106は高台を付す土師器坏で、順に口径は15.5、18.4cmを測る。105は高台の大半を欠失するが、106は外方に開く高い高台が貼付され、坏部は中位で屈曲する。107は龍泉窯系青磁碗I-4a類である。内面は二又工具による片彫りによって口縁端部および体部を区画し、その内部に飛雲文を配する。見込みには幅広の圈線が巡る。釉色は淡緑色を呈し、高台外面まで施される。内外面共に貫入が多い。他に中国陶器の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の土坑であろう。

SK1423(第18図) C-3区に位置する土坑で、北東隅を土坑に切られるが、平面プランは不整な隅丸長方形を呈するものと考えられる。長さ2.05m、幅1.65m、深さ0.65mを測る。北側の壁面の傾斜は急で、底面にはやや凹凸がある。覆土は粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とし、中位から完形に近い土師器小皿や坏が出土した。

出土遺物(第19図108~113) 108~111は回転糸切り底の土師器小皿で、110を除いて板状圧痕が

認められる。口径は8.4~9.6cmを測り、平均は8.9cmである。112・113は土師器坏で、順に口径は14.2、15.0cmである。共に回転糸切り底であるが、112のみに板状圧痕が認められる。他に中国陶器や白磁が数点出土しているが、細片である。これらの出土遺物から12世紀後半から13世紀前半の土坑に位置付けられる。

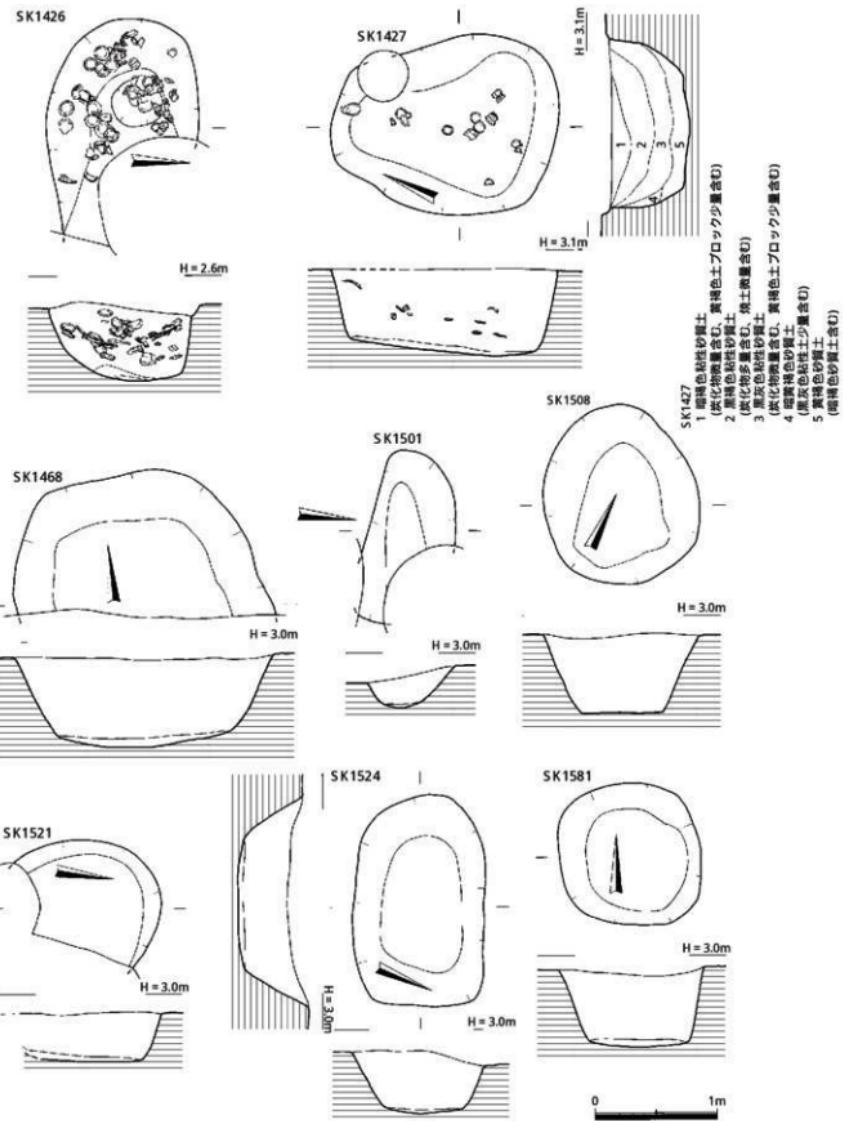
S K1424(第18図) 調査区南端のB- 4 区で検出した不整な楕円形プランを呈する土坑で、南東側は近現代の井戸によって切られている。長径2.5m、短径2.0m、深さ0.75mを測る。覆土は暗灰褐色粘性砂質土を主体とし、炭化物が多く含まれる。中層から上層にかけて、土師器等が廃棄される。

出土遺物(第20図) 114~123は土師器小皿で、口径は8.8~9.4cmを測り、平均は9.0cmである。このうち114~116は回転ヘラ切り底で、115を除いて板状圧痕を有する。また、117~123の外底部は回転糸切りで、117を除き、板状圧痕が認められる。124~131は土師器坏である。口径は15.0~16.1cmで、平均は15.6cmを測る。このうち124~126の外底部は回転ヘラ切りである。125には板状圧痕がなく、指オサエが顕著に認められる。127~130は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。131の外底部には板状圧痕が認められるが、切り離しの痕跡がない。132・133は中国陶器である。132は盤I- 1類で、明灰色の粗い胎土にオリーブ黄色の釉が内面および口縁部に施されるが、口縁部内面は拭き取る。また、器面には化粧掛けが行なわれ、口縁部の内外面には目跡が残る。小片からの復元で、口径は29.8cmを測る。133は壺の体部で、内外面にロクロ目的凹凸が認められる。胎土は黒色粒子を含む灰色を呈し、堅緻である。施釉は肩部外面のみに行なわれ、釉調は光沢のある茶褐色である。また、外面には化粧掛けをしている。134~136は白磁である。134は碗IV類で、外面に貫入が認められる。133は碗II- 1 b類である。外面には片彫りによる縱方向の施文を有し、見込みには段状の沈線を配する。白色のやや軟質な胎土に灰白色の釉が掛けられるが、体部外面の下端から高台にかけては、露胎である。外面には細かい貫入が認められる。136は皿VI- 1 a類である。黄白色の施釉を行なうが、外面下半は露胎である。他に瓦器や瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

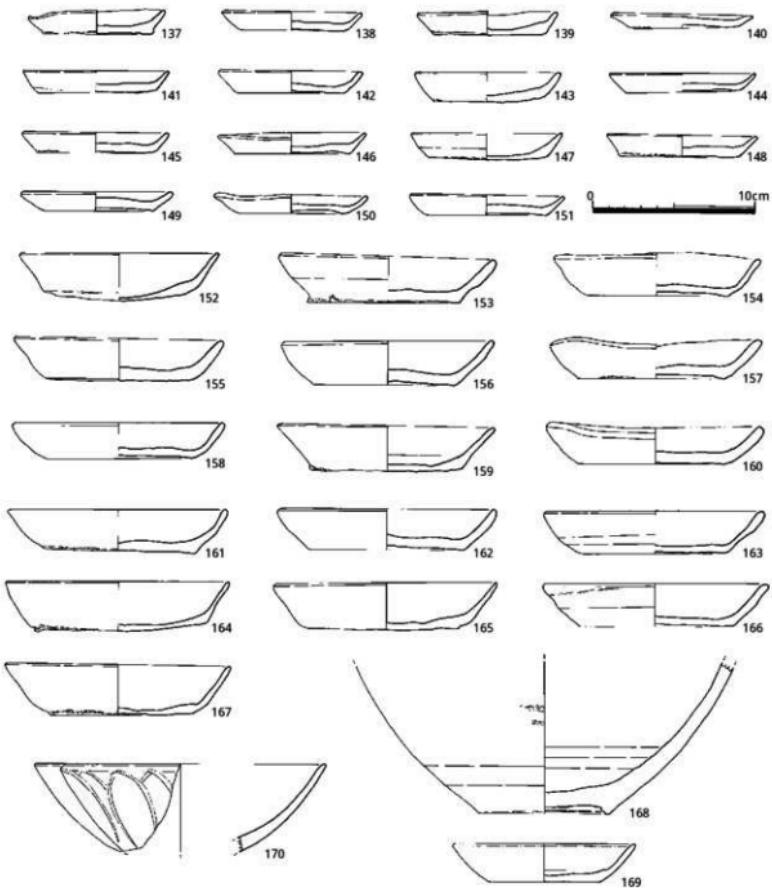
S K1426(第21図) 調査区の東端のC- 3・4 区で確認した土坑で、東半部は調査区外に延びる。SD1418を切り、北東部は近世の瓦組井戸に切られる。なお、プランは、SD1418を0.2m程度掘り下げた面で確認し得た。現況では、東西方向に長い楕円形を呈するものと考えられ、短径1.25m、深さ0.6mを測り、断面は船底形をなす。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とし、土師器を主体とする遺物が廃棄される。また、底面上では、径、深さ共に0.4mを測るピット状の掘り込みを検出した。

出土遺物(第22図) 137~151は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕を有する。口径は8.4~9.5cmを測り、平均は9.0cmである。152~167は土師器坏である。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。口径は12.2~13.8cmで、平均は13.2cmを測る。土師器の色調は、淡黄橙色を呈するものが多い。168は中国陶器の鉢III類である。胎土は粗く、砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。内外面に濁った黄褐色の釉が薄く施される。体部下半は回転ヘラ削りを行う。169は復元口径11.2cmを測る白磁皿IX- 1 a類である。口禿げ部分を除き、全面に施釉され、貫入が多く認められる。170は龍泉窯系青磁碗II- a類である。鏽のない蓮弁文を片彫りによって外面に施す。胎土は堅緻な灰色を呈し、釉は暗オリーブ色である。他に龍泉窯系青磁碗I類や中国陶器盤、銹化の著しい鉄製品等が出土している。以上の出土遺物から13世紀中頃の土坑に位置付けられる。

S K1427(第21図) 調査区南東部のC- 4 区に位置する不整な隅丸長方形プランの土坑で、SP1599に切られる。長さ1.9m、幅1.45m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土には、



第21図 SK1426・1427・1468・1501・1508・1521・1524・1581実測図(1/40)



第22図 SK1426出土遺物実測図(1/3)

焼土や炭化物が認められ、中層には土師器小皿等が廃棄されていた。

出土遺物(第23図171~188) 171~182は回転糸切り底の土師器小皿で、171~173を除いて板状圧痕を有する。口径は8.0~9.4cmを測り、平均は8.9cmである。183は口径14.9cmを測る土師器壺である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。184・185は白磁である。184は碗IV- 1 a類で、体部外面の下半以下には施釉されない。185は皿VI- 1 a類である。体部の屈曲部内面には沈線が通り、外面下半は露胎である。釉色はやや黄味がかった白色を呈する。186は龍泉窯系青磁碗I- 6 a類である。内外面共に貫入が著しく、内面の施文はほとんど確認できないが、外面には不鮮明な

がら片彫りによる蓮弁文と櫛目文が施される。釉調はやや鈍い緑色を呈する。187は同安窯系青磁碗I-1a類である。体部上位で緩く屈曲し、その内面には沈線を配する。また、下半には櫛状工具によるジグザク文とヘラ状工具による施文を有する。外面の下半以下には施釉されない。188は黒釉磁器の天目碗である。胎土は鈍い黄橙色を呈し、光沢のある黒褐色の釉が内面および外面の上半に掛けられる。また、褐色の下釉が施されている。他に中国陶器等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀前半の土坑に比定される。

SK1468(第21図) A-B-2・3区で検出した土坑で、南側をSD1403に切られる。隅丸方形プランを呈するものと考えられ、東西方向の長さは2.1mである。断面は逆台形で、深さは0.7mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、やや粘性を示す。

出土遺物(第23図189-190) 189は復元口径12.4cmを測る土師器坏である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。190は土師器柄で、「ハ」字状に聞く高い高台を付す。見込みにはヘラ状の工具による粗いナデを施す。他に瓦や滑石等の細片が出土した。これらの出土遺物から10世紀中頃から後半の土坑と推定される。

SK1501(第21図) 調査区北東側のC-2区で確認した。長構円形プランを呈し、北東側を土坑に切られる。長径1.45m、短径0.7m、深さ0.35mを測り、断面は船底形をなす。覆土は淡茶褐色砂を主体とする。本調査区唯一の古墳時代の遺構である。

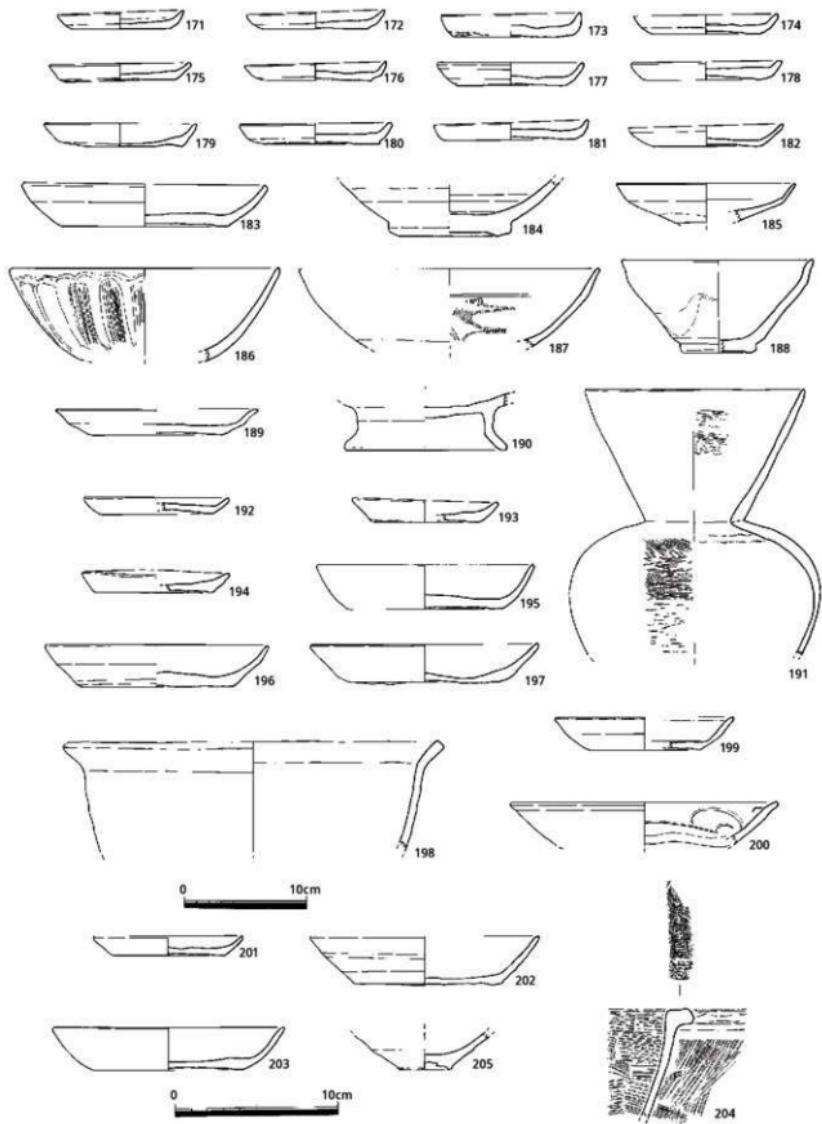
出土遺物(第23図191) 土師器の長頸壺で、扁球形の体部に長い口頸部が付く。口頸部はヨコナデを施すが、内面には一次調整の横方向の刷毛目が残る。体部外面の上半は刷毛目調整後、細かいヘラ研磨を加え、下半はヘラ削りを施す。体部内面はナデ調整を行う。胎土には長石や金雲母片を含む。他にも土師器の細片が出土している。古墳時代前期に位置付けられる。

SK1508(第21図) C-2・3区で位置する不整な円形を呈する土坑で、SE1412を切る。径1.3~1.5m、深さ0.65mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

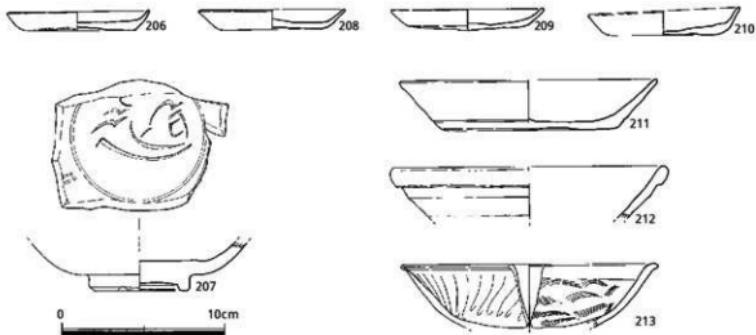
出土遺物(第23図192~200) 192~194は回転糸切り底の土師器小皿である。いずれにも板状圧痕が認められる。順に口径は8.9、9.0、9.1cmを測る。195~197は土師器坏で、外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。順に口径は13.3、13.7、14.0cmを測る。198は復元口径31.2cmの土師質土器の鍋である。「く」字状に折れる口縁部はヨコナデ、体部はナデを施す。外面には煤が付着する。199は白磁皿IX-1c類で、復元口径11.0cmを測る。見込みには段状の沈線が巡る。やや青味のある灰白色の釉が口禿げ部分を除き、施される。200は復元口径16.2cmの龍泉窯系青磁浅形碗I-2類である。内面には片彫りによる花文を有する。他に中国陶器や青白磁等の細片が少量出土している。以上の出土遺物から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK1521(第21図) 調査区の東端のC-3区で検出したが、東側が調査区外に延びることやビットに南側を切られることから、全容は不明である。現況での深さは、0.4mを測る。覆土は暗灰褐色粘性砂質土を主体とする。

出土遺物(第23図201~205) 201は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は9.2cmを測る。202~203は土師器坏で、共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。順に復元口径は14.0、14.2cmである。204は土師質土器の鍋である。短い逆「L」字状の口縁部にはヨコナデを行うが、他の器面には刷毛目調整を施す。また、口縁部上面には綱状の圧痕が認められる。205は中国陶器の皿である。胎土は赤褐色を呈し、暗褐色の化粧土が外底部を除き掛けられる。釉色は灰黄褐色で、内面および外面の一部に施釉される。外底部は粗いヘラ切りである。他の青磁等の細片が出土している。これらから13世紀前半から中頃の遺構と考えられる。



第23図 SK1427・1468・1501・1508・1521出土遺物実測図(198・204は1/4、他は1/3)



第24図 SK1524・1581出土遺物実測図(1/3)

SK1524(第21図) C-3区で確認した土坑で、SE1412を切る。平面プランは隅丸長方形で、長さ1.7m、幅1.05m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第24図206・207) 206は口径8.7cmの土師器小皿である。外底部は回転系切りで、板状圧痕が認められる。207は龍泉窯系青磁碗I-4類で、見込みには圓線が巡り、片彫りによる施文を有する。釉は高台外面まで施され、一部墨付きまでおよんでいる。他に同安窯系青磁や瓦等の細片が出土している。以上から13世紀前半頃の遺構に位置付けられよう。

SK1581(第21図) B-C-4区に位置するやや不整な隅丸方形の土坑で、一辺1.15m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土は黄褐砂混じりの暗灰褐色粘性土を主体とする。

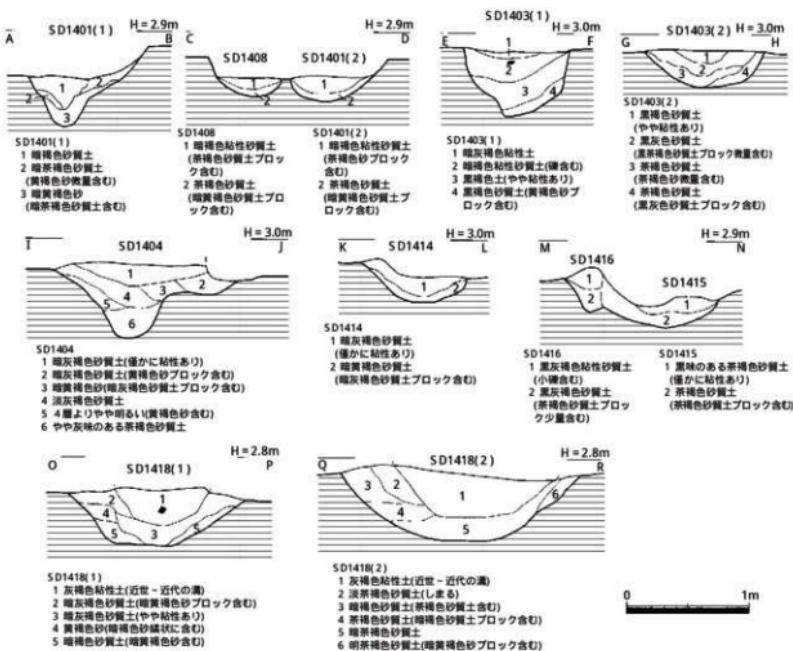
出土遺物(第24図208~213) 208~210は土師器小皿である。順に復元口径は9.0、9.4、9.3cmを測る。外底部にはいずれも板状圧痕を有するが、208・209が回転ヘラ切り、210が回転系切りである。211は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器坏で、復元口径は15.8cmを測る。212・213は白磁碗である。212は碗IV類で、口縁外端部にはピンホールが多い。体部外面の中位以下は露胎となる。213は碗V-4c類で、屈折する先尖りの口縁部を呈する。内面には櫛状工具による施文、外面にはヘラ描きによる花弁文を有する。他に須恵質土器や中国陶器等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

### (3)溝(SD)

南北方向を主体とする中世の溝を8条確認した。このうち、SD1401・1408の2条は、北側に向かって「L」字状に折れる。

SD1401(第5・25図) A-B-2区で検出した幅0.6~1.15mの東西方向の溝で、東端で北側に向かって「L」字状に屈曲し、調査区外に延長している。また、西側も調査区外に延びる。東西方向の方位はE-9°-Sで、SE1402およびSD1408を切る。東側の底面はテラス状に高く、西側に向かって緩く傾斜している。その深さ0.3~0.7mを測る。西側の断面は逆台形状を呈するが、南側壁面の傾斜は北側に比して急である。また、土層観察から溝の掘り直しが行なわれている。

出土遺物(第26図214・215) 214・215は龍泉窯系青磁碗である。214の外面には片彫りによる幅広

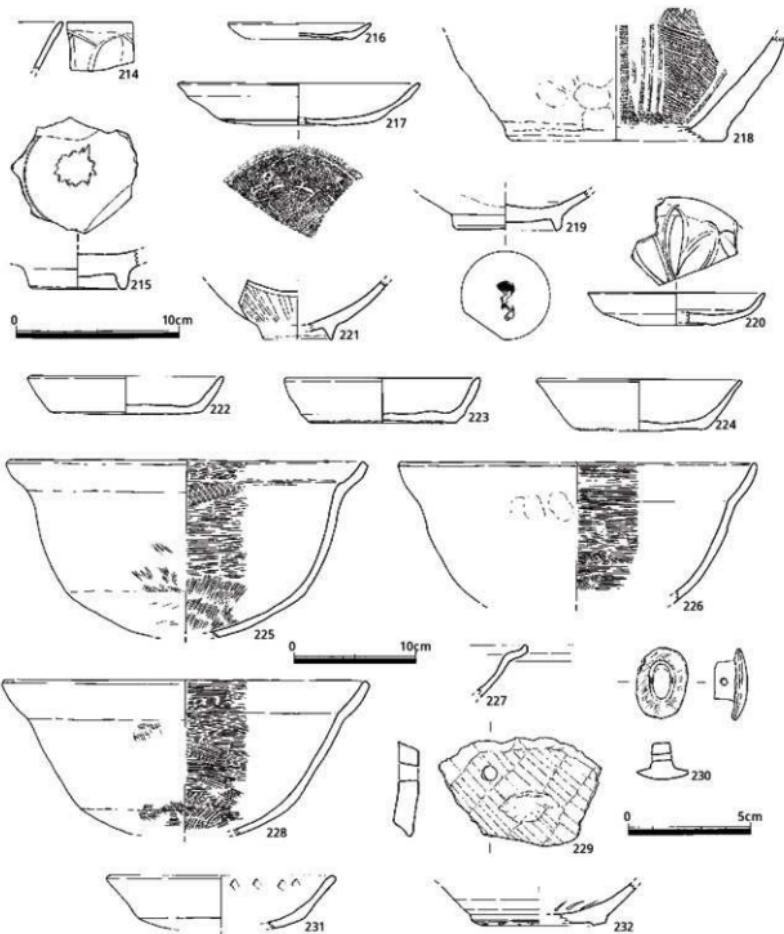


第25図 SD1401・1403・1404・1408・1414・1415・1416・1418実測図(1/40)

の蓮弁文を有し、鈍い不明瞭な鎬が施される。釉は薄く掛けられ、青味がかる。215は見込みに印花文を有するが、不鮮明である。全面に施釉後、外底部の釉は環状に削り取る。他に土師器や白磁、瓦等が出土しているが、細片である。出土遺物は少量であるが、14世紀後半代の溝と考えられる。

SD1403(第5・25図) A-B-C-3区で確認した東西方向の溝で、SE1407・1412およびSK1468を切る。西側の調査区外から東側へ延長する溝は、B-3区で0.1m程度途切れると、更に東側に8.5m延びる。溝の延長方位はE-2°-Sで、幅0.7~1.0m、深さ0.3~0.5mを測り、西側の溝は、東側に比して深く、壁面の傾斜が急である。また、上層には拳大の角礫が投棄されていた。なお、遺構検出面上では重複関係はないが、西端部で南側に隣接するSD1404とは、西壁土層(第6図参照)の結果、前後関係が把握でき、本溝がSD1404を切っている。

出土遺物(第26図216~220) 216は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は8.8cmを測る。217は復元口径14.6cmの土師器壺である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕および輪状に施される爪状の刺突が認められる。218は瓦質土器の擂鉢で、内面は刷毛目調整後に擂目を施す。外面上には指オサエを行なう。219-220は白磁である。219は碗VII-2もしくは3類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。外底部には銘不明であるが、墨書きを有する。220は皿VII-1b類で、見込みにヘラ描きによる花文を有する。釉調は灰白色を呈し、外底部のみ露胎である。221は龍泉窯系



第26図 SD1401・1403・1404・1414・1418出土遺物実測図(230は1/2、225・226・228は1/4、他は1/3)

青磁碗III-2 C類で、外面に細い鏽蓮弁文を施す。尖り気味に收める高台の端部のみが露胎となり、赤褐色を呈する。他に中国陶器や瓦等の細片が出土している。以上の出土遺物から14世紀代の遺構に位置付けられる。

S D1404(第5・25図) 調査区のほぼ中央、A・B・C-3区に位置する東西方向の溝で、西側の調査区外から延長し、西半部約7mを搅乱に切られるが、位置関係から東側で検出された溝に連続す

るものと考えられる。なお、SD1403の項で述べたとおり、同溝に切られている。また、調査区東壁から2.5mの地点で溝の端部が確認でき、SE1425を切っている。延長方位はE- 7°- Sで、幅0.9-1.7mを測る。土層観察を行った中央部分では掘り直しが行なわれている。深さは0.45-0.7mを測り、底面は東側が高く、西側に向かって緩く傾斜している。

出土遺物(第26図222-227) 222-224は回転糸切り底の土師器壺である。224を除いて板状圧痕を有する。順に復元口径は12.0、12.0、12.6cmを測る。225-226は土師質土器の鍋で、口縁部は内湾して、「く」字状に折れる。共に内面には細かい刷毛目調整を施す。順に復元口径は29.6、29.4cmを測る。225の外面底部と体部との境界には鈍い稜が認められる。体部はナデを施すが、刷毛目が部分的に残る。また、底部は刷毛目調整後の擦過痕が認められる。226の外面はナデおよび指オサエを行っている。227は龍泉窯系青磁壺II-3類で、口縁端部をつまみ上げる。光沢のある暗緑色の釉が施される。他に須恵質土器や瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から14世紀代の溝と考えらえる。

SD1408(第5・25図) B-2区でSD1401の南側および東側に並行する幅0.5-0.9mの溝で、西側の端部が確認できた。SD1401同様に「L」字状に折れ、北側は調査区外に延びるが、同遺構に切られている。東西方向での方位はSD1401と同一である。断面は船底形を呈し、深さは約0.3mを測る。出土遺物は回転糸切り底の土師器や白磁等があるが、いずれも細片である。SD1401との重複関係から14世紀後半以前の溝である。

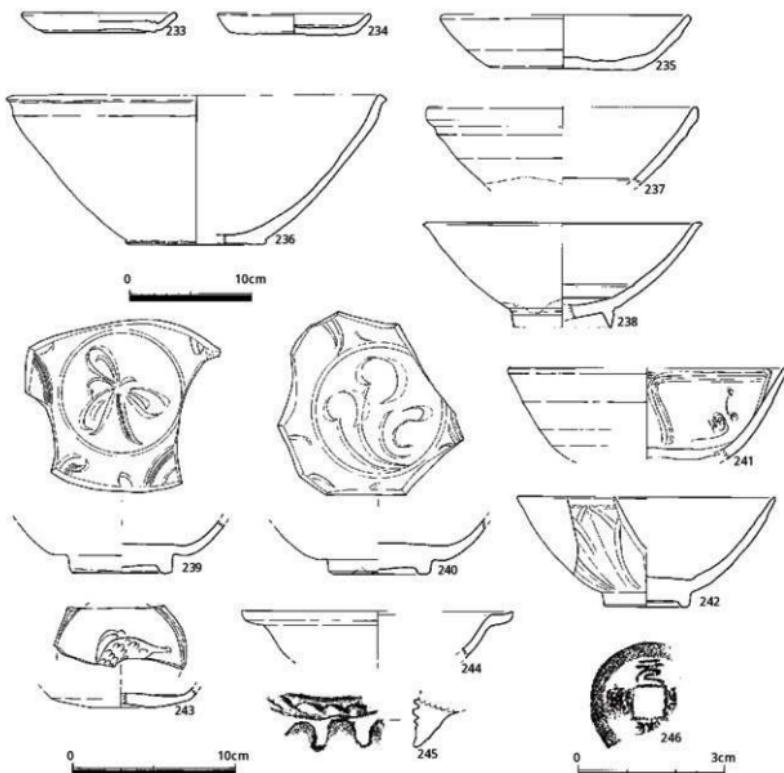
SD1414(第5・25図) SD1404の南側に並行する溝で、同一の延長方位を有する。B-C-3区に位置し、西側は搅乱されるが、西壁土層(第6図参照)の観察では、SD1404に切られる溝状遺構が南側に確認できる。東側はSE1425を切り、更に調査区外に延伸する。幅約0.9m、深さ0.3mを測り、緩く東側に傾斜している。なお、SE1425との重複部分は遺構のプラン確認時に全体を掘り下げたため、上端レベルが下がった状態で図化したものである。

出土遺物(第26図228-230) 228は復元口径30.0cmを測る土師質土器の鍋で、内湾して立ち上がる口縁部を有する。外面はナデを施すが、下半部には刷毛目が残る。また、煤が付着する。内面には細かい刷毛目調整を行う。229-230は滑石製品である。229は石鍋の転用品で、径約1cmの穿孔が行なわれる。外面はノミによる削り、内面は平滑に研磨を施す。230は長径2.9cm、短径2.1cmを測る小判形の基部に、高さ1.0cmの楕円柱の摘みを削り出し、径0.3cmの穿孔を行う。総高は1.5cmで、底面は凸レンズ状を呈する。全面に粗く研磨を施している。他に回転糸切り底の土師器や瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物や重複関係から14世紀代の遺構と考えらえる。

SD1415-1416(第5・25図) 調査区の西端部のA-3区で検出した隣接する東西方向の溝である。両者は重複関係にあり、SD1415がSD1416を切っている。西側は調査区外に延長し、東側は搅乱によって切られるため、詳細は不明である。底面の標高はSD1415がやや低く、深さ約0.4mを測る。共に幅は0.7m前後である。遺物は共に土師器や瓦等の細片が少量出土したにとどまる。

SD1418(第5・25図) 調査区の南側、A-B-C-3・4区を東西方向に横断する溝で、延長方位はE-2°-Sである。SK1413・1421・1426の各土坑に切られる。また、遺構のほぼ中央部を近世-近代の溝が切っている。幅は西側で1.4m、東側では2.7mを測る。深さは約0.5mで、断面は逆台形を呈する。東端部はテラス状に一段高い。溝の規模に比して出土遺物は少量であった。

出土遺物(第26図231・232) 231は復元口径14.0cmの土師器壺である。外底部は欠損のため、切り離し技法は不明である。内面にはコテ当て痕が認められ、平滑に仕上げる。232は越州窯系青磁碗I-2工類である。低い輪状高台を有し、全面に施釉されるが、疊付きの釉を粗く削り、目跡を残



第27図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図(246は1/1、236は1/4、他は1/3)

す。また、見込みにも細長い目跡を有する。胎土はやや粗い淡黄灰色を呈し、釉色は深緑色である。他に土師器や白磁の細片が少量出土している。以上の出土遺物や切り合い関係から11世紀代の遺構に位置付けられる。

#### (4) その他の遺物(第27図)

ここでは、ピットおよび遺構検出時の出土遺物の一部をとりまとめて報告する。233~235はピット出土遺物である。233・234はC-4区に位置するSP1599出土の土師器小皿で、外底部は回転糸切り底である。共に復元口径は9.4cmを測り、板状圧痕が認められる。なお、SP1599はSK1427を切る遺構である。235は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿で、C-4区のSP1623から出土した。復元口径は15.2cmである。236~246は遺構検出時の出土遺物である。236は瓦質土器の鉢である。外面はヨコナデを施し、口縁部下には鈍い稜を有する。外底部には回転糸切り痕を残す。復

元口径30.0cm、器高12.2cmを測る。237・238は白磁碗である。237は碗IV類で、体部内面の下半には沈線が巡る。玉縁状を呈する口縁部下は強いヨコナデによって窪む。238は碗V- 4 a類で、口縁部の上端部に面を有する。体部の下半には細い沈線を2条配する。灰白色の釉が体部外面の下半まである。239・244は龍泉窯系青磁である。239は碗I- 2 a類である。体部内面および見込みに片彫りによる草花文を施す。高台外面まで施釉される。240・241は碗I- 4 a類である。240は見込みに眞状文を片彫りする。また、体部内面には区分線の端部が認められる。241は内面の口縁部下および体部に片彫りによる縱横線を施し、飛雲文を記す。242は幅の狭い鑄蓮弁文を外面に施す碗II- a類で、口縁端部は先細る。243は皿I- 2 d類で、見込みに細い片彫り線によって魚文を描く。外底部は釉を削り取り、暗赤褐色を呈する。244は口縁端部を立ち上げる杯III- 3 a類である。釉調は淡緑色で、厚目に施釉される。245は押圧文の軒平瓦で、下端の押圧文には布目が認められる。その上部の凸線間には波状文を配するが、上端部は欠損している。246は破損するが、北宋代の銅錢「元豐通寶」(初鑄年: 1078年)と考えられる。

## IV . 結語

今回報告した第22次調査5区で確認した遺構は、古墳時代および古代末から中世の2時期に大別することができる。ここでは各時代別に主要遺構の時期的変遷や本遺跡内の位置付けについてまとめを行ないたい。

### <古墳時代>

該期の遺構としては、布留式併行期に位置付けられるSK1501のみが該当する。同時期の遺構は、「II. 遺跡の立地と環境」で述べたとおり、砂丘東側緩斜面において竪穴住居や埋葬遺構が確認されており、その一端をなすものであろう。なお、混入遺物であるが、SE1410出土の複合口縁壺(第12図24)は弥生時代後期の中頃の所産であり、該期の遺構の検出が待たれる。

### <古代末～中世>

本文中に記述した当該期の個別の遺構時期は、例言に記した参考文献等の編年観を参照した。今回の検出遺構は時期による多寡があるものの、10世紀中頃から14世紀におよぶ。

まず、宮崎宮の創建年代に近い10世紀中頃から後半の遺構として、SE1407、SK1468がある。越州窯系青磁碗を伴うSE1407から出土した丸囲みの「大」字銘入り叩き瓦は、本遺跡の第39次・47次調査でも類例が確認されており、注目される。同井戸の水溜には、丸太割り抜き材を用いている。続く11世紀から12世紀の前半にかけての遺構は極めて少なく、SD1418が指摘し得る程度で、12世紀中頃から後半に生活遺構の増加が顕著に認められる。該期の遺構としては、SE1410・1412・1425、SK1406・1409・1413・1420・1421・1422・1424・1581が挙げられ、この中でも土師器の切り離し技法に糸切りとヘラ切りの混在する12世紀中頃の遺構が主体となる。なお、井戸の水溜には木桶が使用されている。13世紀代では、前半から中頃が主体で、SE1402、SK1419・1426・1427・1508・1521・1524が当該期の遺構として確認できた。12世紀代同様に井戸には木桶を据えている。続く、14世紀代には、前代までの遺構の主流であった井戸や土坑等は確認されず、溝状遺構(SD1401・1403・1404・1408・1414)を検出した。これらは、遺構の重複関係から連続して掘削されたものと推測される。本遺跡の溝状遺構の大半は、現在の地割同様に北から約60°西偏もしくは直交する方位を有しているが、同溝群はほぼ東西方向(もしくは真北)に掘削されている。より詳細な検討が必要であるが、宮崎全体の都市空間を復元する上で一つの材料となろう。

# 図 版



調査作業風景





(1) 5区全景(上空から)

※ 左が北



(2) 5区と箱崎地区(南西上空から)

図版2



( 1 ) SE1402(西から)



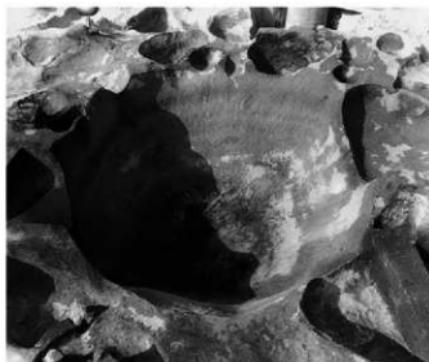
( 2 ) SE1407(東から)



( 3 ) SE1407井筒(東から)



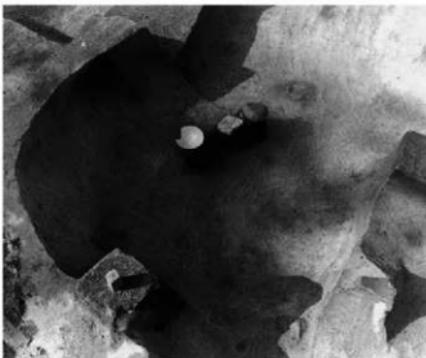
( 4 ) SE1410(東から)



( 5 ) SE1412(南から)



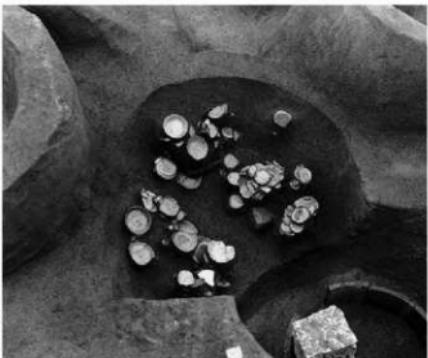
( 6 ) SE1425(東から)



図版4



(1) SK1424(北から)



(2) SK1426(東から)



(3) SK1427(北西から)



(4) SD1401土層(東から)



(5) SD1401・1408土層(東から)



(6) SD1403(東から)



(1) SD1403土層(西から)



(2) SD1404土層(西から)



(3) SD1414土層(西から)



(4) SD1415・1416土層(西から)

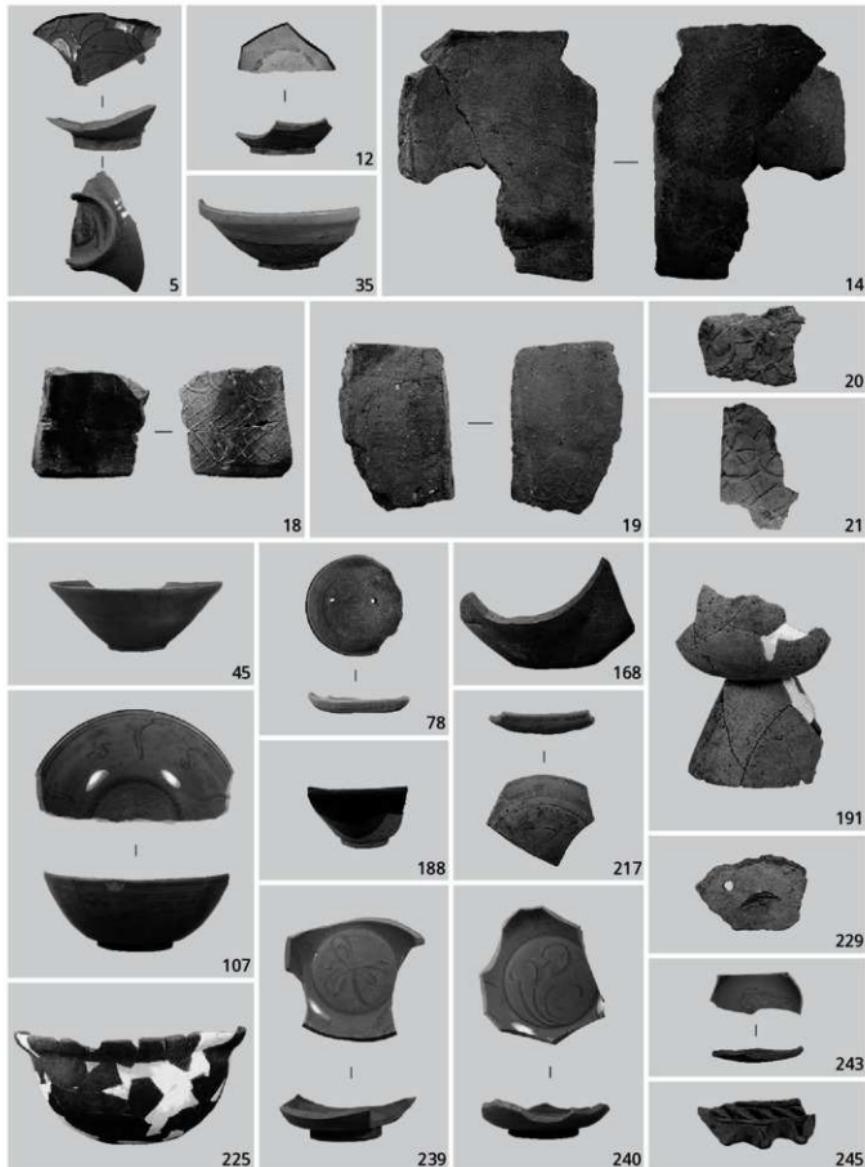


(5) SD1418土層(西から)



(6) SD1418土層(西から)

図版6



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はこざき にじゅうに						
書名	箱崎 22						
副書名	箱崎遺跡第22次調査報告(2)						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	852						
編著者名	榎本義嗣						
編集機関	福岡市教育委員会						
発行機関	福岡市教育委員会						
発行年月日	2005年3月31日						
郵便番号	810-8621						
住所	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号						
電話番号	092-711-4667						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	(日本測地系)				
箱崎遺跡 (第22次5区)	福岡県福岡市 東区馬出5丁目他	40131	2639	33° 36' 25' 34"	130° ~ 37"	20010122 20010418	503 区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
箱崎遺跡 (第22次5区)	集落 (都市)	古墳 古代/中世	土坑 溝 井戸 溝 ビット	1 8 5 多數 多數	古式土師器 土質土器・瓦質土器・中国陶器 白磁・越州窯系青磁・龍泉窯系青磁 同安窯系青磁 瓦・石製品・金属製品		筥崎宮の門前町として発展した中世都市の遺跡である。越州窯系青磁等の出土は、筥崎宮を主体とする对外貿易を考察する上で、貴重である。また、文字銘叩きの瓦は、周辺調査区から出土例が増加しており、注目される。

筥崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告IV

はこ  
箱 崎 22

—箱崎遺跡第22次調査報告(2)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集

2005(平成17)年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有 限 会 社 西 菱

福岡市早良区次郎丸1丁目7番1号